

7349口

通

邑井

# 探原小太郎傳

特 8

3



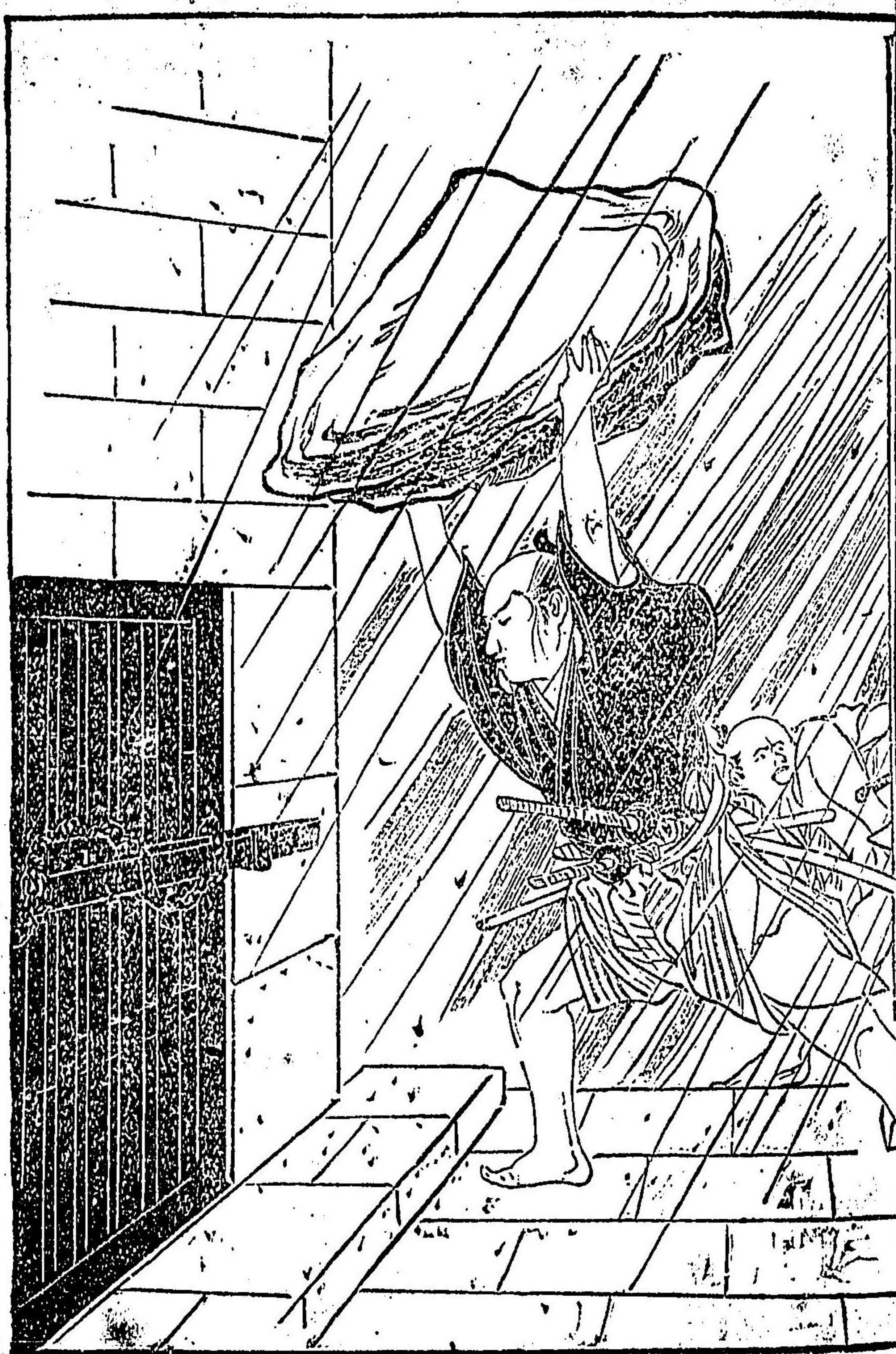
復雙文庫  
第八編



はしがき

磯の眞砂のうれならで敵へつきせぬ、敵討物語古來  
幾百何れか多趣味なるや撰ぶに人は迷ふなるべし』  
茲にまかり出でたるは眞影流の達人塚原小太郎ト  
傳なり演者以て趣味ありとなし我以て然りとす  
讀者以て如何也なすや』  
父はあゝなき及の露消ゆし怨を晴さむと、昨日は東  
今日は西、身は浮き雲のうさくもり日に晒れ雨にう  
たれ、目さす敵は目の前に、ありて打たれぬうの無念











さ、残念さ、一』

旅は淋しき越路の空、漸く輝虎の下にひそめど、皇天  
何ぞ情なからむ、月は晴れぬ、雲は散じぬ、やがて、返  
へす怨みの刃、寄せくる波もあら心地よや、松島の、松  
の緑りに染めなして、鮮血アツと立ちあがりぬ』  
その間忠僕 of 苦心、世路の難等、演者得意の快辨を揮  
ふ、されど天機漏すべからず、乞ふ讀者一本を購つて  
其の趣味のある所を知り給へ』。

薰 寛 堂 識

奥州松島仇討 塚原小太郎卜傳

邑井 貞 吉 購 演

浪上 義三 郎 速 記

第一 席

塚 原 卜 傳

借て今回は復讐文庫と名付けて我が東洋日本に多くありました  
仇討を悉ごとく網羅して申し上げる事になりました然し珍らし  
ひと申して名前や土地にねなじみの薄ひものを申し上げまして  
は却つて興味が薄うございますトハ申しながら其口演者に依りて  
筋が逸つて居りますのは前々の調べ方の疎漏なものと細密に關  
心しましたのと差があります成丈々に名前にもれ染馴の多ひ其の



塚原ト傳

筋の變りまして他の同業の余計に伺がひません處を申し上げ求  
めに應じまして塚原ト傳先生の傳記を申し上げます先達て此の  
人の平素の心得方の宜しき處を冒頭に掲げて生立を追々に申し  
上げます、  
備てこの小太郎ト傳先生が劍道修行の爲めに越後路を漫遊の  
さみ頸城郡高田の城下に額田屋富右衛門と云ふ宿へ泊りまして  
翌日が雨でございましたから逗留を致して居ります吾々ど違  
ひまして近所に女があるとかれ酒でも呑むとかつまらん相手を  
捜しますには幾何も其の友もありませうが殿正な人で食事の後  
はね膝に手を置て御殿様の千松然と控へて居りますから下女が  
参りまして障子を排けて挨拶をして又立てしまひます直に御  
當人も退屈であらうと思ひますと決して左にあらす先きに禰  
を致されて座禰閑房と云ふ事を心得て居りますから此の間だが



塚 原 ト 傳

所<sup>レ</sup>謂<sup>ク</sup>修行の<sup>一</sup>ツでございませう、此の禪家の法と云ふものは隨分  
 六<sup>カ</sup>かしひもので考<sup>ヘ</sup>て居ります内に自分の生れ來つた事が  
 分<sup>リ</sup>りま<sup>ス</sup>す同業中に或る前座が禪學をするつもりで旦那寺へ参り  
 ま<sup>シ</sup>して和尙に何うか禪學を致したいものでございませうと頼みま  
 すると坊主は開けて居りますから坊主「はい」れ前もよいね心  
 懸<sup>ケ</sup>けで先づ座禪をして見なさい目を開いては物が見へると氣が  
 家<sup>カ</sup>るから心を静めて目を開いても眠るから半眼にして考<sup>ヘ</sup>て  
 見<sup>ル</sup>ると我が身の生れ來つた事が分るとねそはりましたから早  
 速<sup>ニ</sup>立<sup>ッ</sup>歸<sup>ル</sup>つて二階へ上つてや<sup>リ</sup>始<sup>メ</sup>りました成程單傳心印不立文字  
 教<sup>ノ</sup>外<sup>ニ</sup>別<sup>レ</sup>傳<sup>ノ</sup>直指人心見性成佛で漸やく己れの生れたのはお袋の  
 影<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>から彼の有難ひやうなむさるやうな門を潜つて此の世へ  
 現<sup>レ</sup>はれた事が先分りしました然し其のお袋の腹の中へ宿つたのは  
 何<sup>レ</sup>うしたかど云ふと是れは親父が其の種をねろしたものである



塚原ト傳

とまではやうやく分りましたが其親父へ種は誰が呉れたものか  
の一段に至つて一と晩苦しんで二階の隅で考へました考が  
へのつかん内に夜が明けてね袋やね親父が朝飯を喰つて居る音  
を聞いて驚ろいてね腹が空ひて参りましたから下りてね飯を喰べ  
ると腹の皮が張つた爲に目の皮がゆるんで自然眠くなつてッふ  
して寐てしまひまして遂に遊講の間に合ひませんで師匠に目  
玉をくらつたと云ふとんきよう者がござまいした是れ等は學文  
と云ふものをしないで唯考がへれば考がへられるものと思ひま  
した間違ひでございます門の外から座敷の見へるものではござ  
いません修行をせずには覺へやうと云ふのは無理です余事を申し  
上げ恐れ入ります彼の小太郎ト傳先生は眞實に文武兩道の御修  
行の上禪學はれくわしふございますから此の平座の間だに種々  
お考がへ遊ばして入らつしやいしました處へ逗留の客と見へまし

塚原ト傳

て年齢は十七八實に絶世の美人が自分とは正反對の人一化九な  
る廿二三のデカバチに尻の多きな下女をつれて湯歸りで見へ  
まして廊下をバタ／＼急ぎ足に先生の障子をガラリと排けてハ  
ッど驚ろひた主従女御免遊ばせ誠に相濟みません事を致しま  
した妾しは同國藩原郡眞柴村名主磯右衛門の娘はと申します  
もので此の下女は宅兵衛の娘かまど申し上げます誠にそつ  
かしひ者で是れが障子を排けましたからツカレ座敷へ足を入  
れました何うか御勘辨の程を願ひます町噂に挨拶をされて先生  
も却つて御迷惑か上イヤ拙者も修行中の若で雨の爲めに出立  
を妨たげられ逗留中でありまして別に何の障りにもならん事  
御挨拶で痛み入るサア何うがね座敷へ下さい女ハイ有  
難ふございませると兩手を突てヂツと顔を見れば年未だ若く諸  
方修行なさると云ふにもかゝはらず日やけをしず色白くして冒



傳 卜 原 塚

秀で眼大きく口元やさしく實に魅ろくべき一個の美男女は只惚惚として立ち去りません小太郎は上「サアどくお歸りなさい永くね出でになつては迷惑速かに立去りなさい女「ハイ恐れ入ります然し旦那様貴下先刻雨の爲めに逗留何んの隙にもならんぞ仰しやつたではございませんか上「夫れは申したがり障子を開いて座敷間違ひの事は敢て妨たげにもならん何時迄もおん身ソコに居つては迷惑じやと申すのだ第一聖人の教へには七才にして男女席を同じふせずと云ふ何故往きませんか女「此光どもではございませぬが……甚はだ恐れ入りますがしびれが切れて立ち兼ねます少しの間だ御用捨を願ひます上「よるしい足がしびれたとあれば之も輕症の病ひだ病氣とあれば仕方がない養生の上ね歸へりなさい女「さようなれば暫ばらくの間だ御免を蒙じりませすとニコニコ片頬に笑を含んで小太郎の顔を見つめて居りま

傳 卜 原 塚

す上「コレ〜娘しびれがきれたと云つて拙者の顔を見たと云つて癒るものじやアない其方に向ひて居て貰ひたい女「少しも横ぞ向く事が出来せんから暫らくの間だ此の儘でお願ひ申します上「さて〜困つたものだ然らば拙者も此方に向くとクルりと向ふを向ひてしまつた女は残念ではありませぬが前へ廻る事も出来ず只々後姿を見て居ります彼の女の下女のかまは下「れ嬢さん困るじやアございませんかこびれがきれますのなら塵の塵を取つて額へ貼つて置き遊ばせ夫れで叶せせんければ其の足の搦指を逆に〜横に捻るのでございませぬア〜痛い〜妾くしのぢやアない貴嬢のでございませぬサア妾くしが指を折つて上げませうと傍へ寄つて嬢の足へ手を懸けますから驚ろひた娘のねばませれ何をするんだ〜くすくすたたくつて叶ないヨ下「其のくすくすつたいのを直すのですと色氣なく下女が指をヤケに折







塚原ト傳

ばん早く往つて下さい永く居られる程迷惑だと云つたさりの  
んとして物を云はない老母は暫らく顔を見て居りましたが失禮  
を致しました御免遊ばせと挨拶をして立歸りながらア立派な  
旦那娘が思ふも尤もつた羨しも思ふコンナ婆アに思はれた  
節にやア大變そのまゝ座敷へ歸りまして娘の様子を見ますと  
何んどのう氣も勝れず夕飯を喰べません夜も床へ入りました  
得もやらで夜徹しに考がへ込んで居ります之れ等が世に云ふ  
煩ひの始しでもございませう翌日に至つて母は再び塚原の座  
敷へ参り母旦那様ね早ふございますトア又老母が来た何  
んでございます母實は伺がひ申しあげたい事があつて参り  
ました旦那様は奥様は貰ひになりましてございませうかト  
コレは怪しからん事批者は未だ修行中で妻なすのあるべき道理  
はない母左様なれば何れ奥様を貰ひなさるのでございませ

塚原ト傳

ト如何にも家を治める自分には妻を迎へるの考がへである  
母誠々に恐れ入りまして百姓風情の娘迎も御意には叫びます  
いが妾くしの娘を貰ひ下さる譯には相成りませうかトア  
ハ、何を申すか昨日参つて拙者が前にしびれをさらした娘彼  
はれ前の子であらうが愚じやノ馬鹿である阿房である早く申せ  
ば少し氣狂ひ染みて居る至たく父母の教育が不足ない否性質  
愚鈍である庭へ敷へがないからかやうの馬鹿な者が出来る前  
の丁見では目鼻が揃つて顔立がよければ夫れでよいと思ふか容  
貌を見て女をたのしむば娼妓を買ふか或ひは妾を置くものは夫  
れでよろしい一家の妻女として家政を預けるのに容貌や風采を  
見せて人の妻にやらんやうとは拙者をして遊治郎と思ふ不禮の  
丁見から起るのじや養なふて致へざるは父の誤まり平常の育て  
方の不行届は母の罪であるお前たち夫婦は智慧がないから娃の



塚原ト傳

子は蛙と云ふ例への通り親子揃つて不都合なものである暫時の  
間だも同席はならん歸へれ 老母は驚ろひて立歸つて参りま  
して娘の枕元に座つて 母ア一立派な旦那だお前の迷つたのは  
無理はないが今では向ふ様も御修行の身の上何か一ツの功を立  
てアノ旦那のれ心に叫ぶやうにして御相談をしたら奥様になれ  
ん事もあるまい先づ暫らくは辛抱をして縁と月日は待つがよい  
と云ふ事はいるはたんに書てある只辛抱をしまされヨと一  
言の母の教訓娘の爲めには患者が大博士ドクトルの配劑よりも  
能く功を奏しましたものか迷ひの雲が晴れまして気分すいしく  
なつては「ア一お母アさ誠とに濟みません御心配を懸けまし  
た昨日はれ姿を見て迷ひましたか今日はお心ざしを聞いて尙ほ一  
層お氣はしふなりましたか気分は晴々と致しましたコレからア  
ノ旦那の奥様になれるだけの資格を推らへてから誰か然るべし

塚原ト傳

れ人を頼んで奥様になれるやうに致させうと速やかに悟つて  
母に安心をさせましたは並々の女ではございませんコレは塚原  
先生の言葉は劇にして趣むきあり一婦人をして徒づらに世上の  
笑ひものにせず彼を賢婦にして後世は自分の爲めになると云ふ  
後に一條のね話しもございますか夫は席を追ふてれひくしに申  
し上げまするが先づ小太郎傳先生が色に迷はず武勇に誇らず  
親切にして言葉少なく實に武士として恥かちからざるれ人で  
ございますから先づ第一着に性質を申し上げて立歸つて當人の  
成蹟を悉ごとく一席の講談として申し上げますから他の講談師  
が申し上げる只塚原は武勇一圖の人にして父の仇討をして強ひ  
れた話ばかりでない實傳而已を申し上げますからよろしく御了  
察あつて此の講談の大團圓まで御愛讀あらん事を伏して冀望致  
しませす



塚原ト傳

借て塚原小太郎勝義後ト傳ト号したのでございます父は常州  
 原の住にして塚原土佐守と申されましたが次男に致して小太郎  
 と名づけけまた全体長男に太郎があつて次男次郎三男三郎と名づ  
 けますのが凡ての順でございますが當家は長男を年人と名づけ  
 まして次男に生れまじした勝義を小太郎と名づけたるは少しく譯  
 のある事でございますが之は別段本文に關係がございませんか  
 ら御預かりといたして置きまして先づ當人の生立を申し上げま  
 す小太郎は生れながらにして温順柔和至つて小兵でございます  
 武藝者となるべき人とも思はれませんかつたが六才より十二才  
 まで頻りに漢學をいたして居ました十二才の春父の前へ出まし  
 て 小「御父上 父「ハイ何んじや 小「私くしも當年十二才でござ

塚原ト傳

います 父「ハア一 成程十二才じや夫れが如何いたした 小「兼  
 て道實は十二才の時に文章博士の名を取るべき人と云ふ事を其  
 の師の爲に見ぬかれまじした又義経は遮那王牛若なかと名づけま  
 する中に武藝に志ろさじ十二才にして京下り美濃の青墓にて兎  
 賊を退治楠正行は十一才にて櫻井の驛に父の遺命を受ける皆な人  
 は十五才未滿にして其の志ろさしを立るものです秘くしも今日  
 迄父上の御養なひを受け神林先生の教訓に依て不重法ながら文  
 章の一へんも作る事になりまじしたか今の世は文を以て渡るべき  
 時ではございません今時よりは武藝に勉強いたじたいの精神で  
 ございます何うか御免しを願ひます 父「ハア一いゝ 故人  
 の語しを引て武藝勉強をいたしたいと云ふよろしい 武家に  
 生れて武藝を好まじものはないが熱心にやつて見やうと云ふの  
 は至極結構然しお前の師と頼む人があるか何うじや 小「ござい



塚原ト傳

ます兼て承たまはり及びますに上川箕輪に上泉伊勢守秀綱と云ふ大先生の心でございませぬ父よるしい夫れでは早速當方から書したいの心でございませぬ上誰かに送らせやう小夫れは叶せぬ面を以て照會して其の上誰かに送らせやう小夫れは叶せぬ向ふは劍道の道場をひらいて門人を集める人です御問合せには及びませぬ又私くしも十二才何にも人を以て送つて貰ふにも及びませぬ兄上隼人隊がござれば万事心にかゝる事もございませぬ父上の御免しを蒙りまして安心をいたしました早速出立を仕ります父の土佐殿は大きに感心して其の志ろさしでなくばなるまい然らば思ひたつたを吉日と申す事もある後とも云はず早速出立をせよ小有難ふをございませんと立上らんとする處へ

塚原ト傳

ります此の脆弱身体の小太郎一人の旅殊に上州までは余程道のりもございませぬ誰かつけてれやり遊ばしませんでは妾くしは心配コレ小太郎決して行くなどは止めませぬ誰か一人の家來をつれて行くのがよろしからう小太郎は母の前へ手をつきまして小御尤ももございませぬ父母へ心配をがけませぬのは第一の不孝左様ならば誰か僕を一人つれて参りませうコレから僕の中で至つて忠義もの熊殿と云ふものをつれて出立何分火急の事ですから万事整ひませんければ我々のやうに拾が賢屋へやつたの單物を洗強にやつたと云ふのではない衣類は各季に入れて旅費或は修業中の學費は桐卷へ入れの僕の熊殿が預かり兩親に見送られて門を出る家來どもは皆々外堀まで見送りました偕て道中滞りはりなく上野の國箕輪の上泉の邸へ参りました見ると實にや派なるもの取次を以て先生へ對面を願ふ塚原土佐殿の次男と



塚原ト傳

聞きましたから御逢ひなさると小兵にして色白く髪に一個の美少年否十美童子 伊ア一貴公が小太郎と云はれるか 小左様でございませす 伊何才しやナ 小十三に相成ります 伊今取次から聞ば武藝熱心で入門をしやうと云はれる左うだが未だ筋骨もかたまるまいから折角参られたもの今日より入籍は免すがしばし他の者の立合を見た方がよからう其儀承知ならば居つてもよろしい又急ひて竹刀木劍等が手に取りたくば他の門へゆかつしやるがよい小太郎は先生の顔しばらく見て居りましたが仰せの御く未だ十五才未滿先生の門人になるまでは固まりませうが折角遠方の處御慕ひ申して参りましたものでございすすから御門人の列に御加へ下され日々他の御門人衆の立合拜見を願ひたいものでございませす 伊よろしい委細承知をいたしたコレ 存介や此の塚原をアチヲへつれていつて福宮寺伊豆に申して一

塚原ト傳

同に引合せるがよろしからう指圖の間だから小太郎は父よりとたらしたる束脩の目録を差し出しました無欲のやうでも束脩なきは師弟の禮に非ずと申しませすから心よく受納いたされまして倍々小太郎が一同の連中へ挨拶をいたしまして明日より道場於てまばたきもせず見て居ります然る處十三十四十五才まで足懸け三少年更に竹刀木劍を持たない日の間は人の稽古を見夜に入り交すれば丁日は軍學の稽古がある半の日は自分には是迄見ました経史鷹書を繕て夜の更るのも知らず日と忘たつたる事はございません今日は三月の十六日庭の櫻も爛熳として今を感じると咲乱れて居りますチウ 菴が彼の木の間に飛ひかはしますと其羽の爲に櫻の花びちは左ながら雪の如くに散りれちます様側になつて見て居た小太郎はア一成程人生程はかないものはない百までの長命はめづらしいと云ふが雪まで保つ花はないと今小



塚 原 ト 傳

鳥の爲めにさかりの花も災はひをうけて散り落ちてしまふ人間も  
眞ろの如く何時に災害のあらんも知れず之は一時なりとも徒づ  
らに過すべきものでない師の命にもあるやうではあるが最早十  
五才御稽古を願つてもよからうと少し心が動いたから二た足三  
足進まんとする障子の中にヤツハツと振り向くとタンに障子の  
ひらくや一刹那扇子を持って小太郎の腦上をビシヤリハツと体を  
かはしたつもありであるが小鬚のあたりをしたゝかにうたれた何  
うじや日々道場で立合を見て居るが何の爲めに見てをる角力や  
遊馬を見に往くのではない只其方が後來稽古をするに人の立合  
は如何なるもの油断があれば打れるもの腕の極らざるものは打  
つ能はざるもの夫れ等を見せるが爲めに三年間道場に居るでは  
ないか然し此の方に打込む扇子で正面を狙つたに小びんまでよ  
けたは聊さか油断のないと云ふものであるよろしい今日から道

塚 原 ト 傳

塚にての稽古をゆるすであらうと是から日々の稽古になりまし  
たが何事も急ひでする事にろくな事はございませぬ我々講談師  
も昨日今日の能座何か僥倖にも後座が打て二三本の席を廻りま  
すと俺は眞打なり大先生なりと威張つて居ますが偕てイザと云  
ふと丁場へ向ひますと古く此の業をつとめて眞實の修業をした  
ものとは太刀打が出来なくなりす然し古くばかりやりまして  
もよく落語家の云ふ甲州のコロ柿流なすは下さいませぬが出来  
るものがつゝしんで勉強したのは必らず其功を奏するもので生  
意氣の慢心は何に藝にも功を奏する事が出来ませぬ小太郎は十  
五才から十八才まで四ヶ年の間だに彌々皆傳とまでに進みまし  
た免狀を渡してもよろしいのではありませぬが伊勢守秀綱どの  
流石一万人の門人を集めるだけの御人ですから青森の小太郎に  
免狀なすを渡しては四天王を始め其の他の年長のものに根みを



塚原ト傳

起させても彼が爲りによくない出来さへすれば免狀なすは渡す  
も渡さいるも多くの差がないと云ふので御自分の意中に我が家  
の高弟後世望みを屬するものは此の小太郎を以て第一とする  
樂しんでたいてなさる處へ國元常陸の塚原より急使を以て父の  
士州は大病事によれば如何ならんもはかりがたし兎に角此の使  
ひと同道にて歸國あるべしとの文面懸るひて此の事を師に物語  
り早速暇を貰つて立歸る事に相成りました然るに小太郎出立の  
翌日より先生伊勢どのの感胃にて床につさましたたが追ひく  
熱ついに其頃申す傷寒只今から申せば腸窒扶斯と申すやうな熱  
病ですから介抱人も傳染を恐れて町學にするものが少なふとさ  
います只今のやうに看護婦などはありませんから使ひの奉公  
人でも行届きません門人衆は親切がありませんから自然に病ひも永  
れないから何事も怠たりがちになりませすから自然に病ひも永

塚原ト傳

る道でございませす床に伏して早一ヶ月道場は先生が居りませ  
んでも四天王を始め其他の門人相互に思ひやい立合勉強いた  
して居ます處へ玄關に大音聲たのむ……取次の若侍は吐け出し  
て来て見ると頭上には光りかやく兎巾を頂だき鈴掛笈櫃手に  
は金剛杖三尺にあまる大太刀を佩各々模様どつたる脚絆を穿て  
かの安宅の關へかよりし源家の落武者義經公を始め一同のもの  
も斯くありしかと思はれる中にも先達つたるは辨慶にも勝ると  
も劣らざる大兵取次の侍らひに向つて我々は出羽の國羽黒山に  
住する信濃坊圓海と申するもの伊勢殿の御有名を慕ひ一本の御  
手合せを願ひたい事である ○是は折角の御訪問をございませ  
が師の伊勢は先月來の病氣中々御手合せは勿論御面會の儀もむ  
づかしゆふございませう大口あいてカラ〜と笑ひ 圓ハハア  
……左様か此頃に行く先々に於て圓海風と云ふものが流行して



塚原ト傳

其方が向へば病である或ひは又虚病なすをつかふものが幾何も  
 あるまさかに日本有名な上泉伊勢守左様な虚病はなされまいと  
 思ふが何うも怪からぬ ○アイヤしばらく御坊ね待ちなさい  
 圓何を云ふ ○拙者は當家の門人鈴木三郎と申するものでござ  
 いますすが只今仰せに作病をかまへたり圓海風が流行と云れたが  
 左様なものか世上にあるかは知らぬが憚かりながら上泉伊勢守  
 は武士でございます足下の爲めに化病をかまへる氣遣ひはござ  
 らん師が無事でありませすれば屹度御立合申しますすが御病氣なる  
 が故御病氣と申しました甚だ足下は不禮な事を云はれる 圓だ  
 まれ小童イヤサ小僧中々其方も感心な奴だ君はづかしめられる  
 時は臣死すとか云ふ事もあり主を誹られてくやしと思ふか師  
 を悪口されて立腹するなぞは中々感心な奴だよ御病氣なれば  
 病氣でもよいが伊勢とのばかりではあるまい承はれば一五以上

塚原ト傳

の門人のある事を聞た其の門人衆に立合してもよろしい早速道  
 場に取り次つしやい如何にも横柄の言葉に口惜ひと思ひました  
 が仕方がない道場へ来たつて見ると五十旗伴藏柳生又左衛門神  
 宮寺伊豆丸目藏人の四天王が居り師匠病氣中は此の四人が代理  
 として師匠の席について居る今日は九目藏人が當番ですから先  
 生の席につて其他の門人ともが二三百名ばかり君て立合て居る  
 處へ鈴木三九郎がかけ込んで参りました 三九目先生へ申し上  
 げます 殿何んだ 三怪からん事が出来ました 殿先生の御病  
 氣に變でも来たか 三イテ左うではございせんが 殿夫れな  
 らば別にも一大事と云ふ事もあるまい 三兼て近頃日本国内を徘徊  
 いたしまして諸所の町道場を荒し或ひは諸家大名の御抱へた  
 る御指南役が御暇になつたり或ひは腹を切つたと云ふ噂さの  
 言ひ出羽の羽黒の山伏圓海と申するものが参りましたが如何い



塚原卜傳

たしませう各々顔を見合せてゐると彼の五十旗伴藏が律之は  
御一同の衆拙者が考がへでは先づ先きが病氣の事故此の領を由  
して歸へしてよろしからうと五十旗が申しますと鈴木三九郎が  
三三只今先きが御病氣だから御面會さへもなりませんと申したら  
ば大口あいててカラと笑ひまして此頃は圓海風が流行する  
か作病をかまへて會ぬ奴がいくらもあるとか申しして實に高  
慢極まる奴私くしの事を小僧だの小童なすと申しますと之を聞て  
伴藏満面眞朱の如く相成り伴僧ひ奴だ其の儀ならばよろしい  
之へ通せばいかりながら數年來きたへあげたる此の腹前彼奴を  
打のめしてくれん鈴木早速之れへ通せと怒られるを傍で聞いて居  
た柳生又左衛門日本開國依頼頼道ばかりでない智恵もあり忠孝  
もあつたでございませうが武藝者から出て御雜新前まで一方石  
の悪候の家を殘し當今に至つても華族で今にお前は御繁昌をい

塚原卜傳

たし大和添下の郡柳生の庄下正木坂の御陣屋を預かり柳生但馬  
守と云へば扇だけの小兒までも其の名を知つたと云ふ後年天下  
に名を爲す人又考がへも違ひます又マツ五十旗を待ちなさい  
短慮功をなさすと云つて過立ちか出来ては大事彼が如きものに  
打勝つた處で手柄にもならん若し此の道場へ通して勝負は時の  
運も申して必らず名人上手であるからして勝と云ふものでは  
ございませぬ貴公を始め拙者又丸目神宮寺なすが敗を取れば先  
生のお名前も汚すではござらぬか元々武家にあらず修行者と云  
へば僧侶に似た武藝の局外者でござる如何やうナ悪口を申すと  
も夫れ等に構はんで道場へ通さん方がよふございませう此時に  
神宮寺伊豆が伊豆程柳生氏の御説は御尤もでございすが此儘  
にして歸しては我々の度量を感ずる者が多いか但し恐れをなし  
たと云ふものが多ふござるがマツ拙者の考がへでは世上の人々



塚 原 ト 傳

は上泉の門人は度量が廣ひと云ふものが少なくて彼に恐れを  
なしたと云ふものが多くあらうと思ひます左ある時には却つて  
先生の御恥辱でございませう兎に角之へ通した方がよからうと  
思ひます此の言葉に九目藏人が 殿左様御尤とも自然し拙者  
には何んとも申されません御集まりの御門人衆はと一同の顔を  
見た今から云ふと起立に賛成を取るのでもございませう門人の中  
から二三名夫へ出立して ○兼て羽黒の修現者圓海と云ふもの  
の不潔はさゝ及んで居ました四天王とも云はれる貴下方が正か  
に負るやうな事はございませうか何うかた立合願ひたふ存じま  
す二三人のものが云ふと一同の門弟が之に和して何うかお立合  
と願ひ申す折角柳生が一度笑はれても道場に疵のつかぬやう  
に考がへた事も之が爲に水泡となりました一同が是非立合と云  
ふので鈴木三九郎が玄關へ立出まして 三御待せ申しまして相

塚 原 ト 傳

濟ません先生は不快でございませうが九目藏人を始め其他の門人  
が御手合せを仕まつると申して居ます 圓コレハ 忝じけな  
ひ御面倒ながら洗足を何うか 三ハイコ、デ恐れ入ります此  
の板塀について本へ曲りなされると井戸がございませう夫にて  
御洗足下さい穿物はいくらもございませうから早速ソコ横にま  
はつて來ると井戸ばたに盥が三ツ三ツある何れも修現者皆々足  
を洗つて案内に従がひ奥へ通る大黒堂の金山辨天堂の銀山昆沙  
門堂の何とか布袋堂の……希袋堂なすはないが名々天符を名乗  
つて居ますから不思議な名がついて居ます何れも揃つて道場へ  
來ると流石の此の信濃坊圓海が始めて心したのには上泉の道場  
では一万人以上の門弟を稽古をするだけ廣々たる道場の建方實  
に目を驚ろかすばかり向ふを見ると塗板に門人の名がしたゝめ  
てあつて正面には八幡大武神を祭り弊を切つて神水成ひは神酒



塚原ト傳

神饌が備へてをる何れも立派なものでございませぬ此の時に九目  
藏人が夫へ進みいで 藏之れは 只今取次のものから承た  
はりましたたが羽黒の修現者信濃坊との云はれるか拙者は當家  
の門人九目藏人と申するもの只今取次の申した通り師匠伊勢守  
は永く病氣でございませぬが故我々か仗つて初心の門人どもへ  
稽古をいたして居ます別して本日の當番は拙者でございませぬ折  
角の御入來故未熟ながら雨三名のものどもお相手をして仕まつりま  
せうマツ御休息下されたい 圓之は御挨拶申したくれた圓海で  
ござる御身が四天王の御一人九目藏人のでございませぬ拙者  
の附屬のもの之に四五輩つれて参り申した御覽の通り身は修  
現者に候へども近頃は世の中乱れて居まして町人百姓たりども  
草刈耕やし店頭に商なひをするに云ふのみでは安心のならぬ世  
の中だ我々は役の小角の流れをくみ大和入峰の金剛山なすをひ

塚原ト傳

いいて夫々修業いたした僧侶にして僧侶にあらす申する迄も  
なけれども不動の体を得て腰には降魔の劔を帯してをれども武  
劍の遣ひ方を知らざれば實に目あつて物を見ざるも同然依つて  
聊さか武法の道を得會いたし諸所へ参つて立合をいたした處此  
度は是非に先生とて手合せを願ひたく参りたるに御病氣どの事  
誠に残念然し名々力が御手合せ下されると云ふをきいて聊さ  
か悦びの色をあらはしたり長く御挨拶するも如何コレ 金  
山之へ出る花魁みたやうな名をつけた金山と云ふ二十七八  
になる人物色淺黒く鼻高く烏天狗見たやうなる脚半をのけて鬼  
巾をいたひひて出ると何う見ても鞍馬の山で牛若丸に打れて居  
さうな奴金剛杖を此方へ置てアチラコチラを見て居ります先刻  
からムツとして居た五十旗伴藏が 伴アイヤ拙者は當家の門  
人の一人五十旗伴藏でござる金山とのれ相手をいたさんハツと



塚 原 ト 傳

云ふと彼は不禮にも金剛杖を打振つて来たコハ木沙法なりと思ひました。彼が不禮をモ一どがめる間がない三尺蛤乃にこき上げたる木剣を取て伴藏二三合打ち合たがヤツと云つて金山が打込む棒は風を切つて参ります。二三度やりすとして置て横に拂つた木剣の爲腰を打たれて金山がバツタリ倒れ 金参つた 伴参つたか 金たしかに参りました。金山たしかに参りやがつた之を見て居た毘沙門堂の万山伯山の弟子を見るやうな奴だと打ち合せました。がコヤツは少しく出来る奴と見へて五六合ばかり合せると内にエイと来た木剣の爲に金剛杖は眞ツ二に折れた。参つたと云つて飛下る流石は五十旗伴藏の腕前美事なるもので。此時に至つて圓海が圓まだくみぐるしい奴モ一貴様でもで。又相手にならんイヤ五十旗氏中くの御手の内此の上は圓海自

塚 原 ト 傳

からね立合申すでございませう二人負たから後の奴がまた負ては自分が立合のになれくれが出ると思ひせきたつをどめて夫へ出た五十旗は二名に打かつたのであるから勢はひはげしく立合ふ。此方は木剣向ふは金剛杖打合せする事十二三合大勢の門弟は此の勝負如何と手に汗を握つて見て居るエイヤツと打込んだる金剛杖五十旗伴藏が受け損じたか参つたかと云ふ續ひてブン一と左りの肩口をぶたれてアツと云ふたが左ながら肉がちぎれたか骨が折れたかと思ふばかり背に氣が遠くなるばかり後へ動と倒れ。た圓アハハイヤ五十旗氏の腕前は之れかナ御跡は何方でござる跡は……つかへて居る髪結床のやうに跡くと云つて居る神宮寺伊豆が此時に飛出して伊サア拙者が御相手仕まつるでございませう圓貴公は伊拙者は神宮寺伊豆でございませう圓コレハくと云ひながら互ひに向つてしばらく位の間



塚原ト傳

をして居る内にヤツと云ふ聲と共に二三台ばかり合せてゐる  
飛込んだ圓海同じく伊豆は肩口をうたれて骨がくだけたかと思  
ふ参つた云ふと飛下りました圓は跡はだれた此の時九目  
人が目を三角にして見て居たか此の上は拙者がれ相手をいたさ  
うと夫へ出ました柳生又た備門はア一情けない事になつた四天  
王の内三人まで負るやうな事があつては當道場の恥辱此の圓海  
と云ふ奴は實に非常な奴だ劍術は左うでもないが力は廣大所謂  
怪力と云ふのだらう昔しの辨慶と云ふのもコンナものであつた  
かしら哀れ八幡大武神何卒此のたふかひを勝し玉へ九目に勝を  
取らせ玉へと口には云はねと心中に神を念じまなむをどじてさ  
しうつむいて居る藏人はうしろ鉢巻玉だすき十分支度をして  
夫へ出た互ひに呼吸をはかつて打込む木劍金剛杖同じく十合は  
かり打合せて居る間に益すといらつて圓海がブーンと打込

塚原ト傳

む杖は電火の如く實に目にさへざるばかりアツと云ふ内に木劍  
を捲落す南無三と思つた藏人は打れては堪らんから跡へ飛下つ  
て参つたと云ふ最之れにて出るものはない圓海は悠然と四方  
を見まはしをして圓先生と立合の爲に御當家へ参つた拙者  
何卒伊勢殿の御病床へ御案内をして貰ひたい御門人に御手合せ  
をなして先生をね知申さずには歸ると云ふは不禮又名醫にもか  
よりをらうが我が修現の法は神を念じ佛を祈り悪鬼退散妖魔降  
伏病氣全快の祈りもござる御案内下さいと何んともつらくさ  
彼が言葉表向は見舞と雖へども内心は化病でないかと云ふ野  
もあり九目藏人は圓コハ御親切なる御言葉恭じけない見苦る  
しき病床へた通し申すも如何でございますか一應師にうかひ  
御挨拶いたさんしばらく御控へ下さいますし鈴木三ハイ藏師  
匠の病間に参つて右の次第を申しあげてこい三長こまりまし



塚 原 ト 傳

たと鈴木三九郎逸足だして奥の間へ参りまして 三先生申しあげます 伊ウーンだれた 三三九郎でございます 伊薬は今香だモ一少くあどで香ふ 三薬じやアございません誠とに御病中に御心配をかけるやうでございますが只今コレカクカクしな次第と一部始終を物語りましたから伊勢の守は中ば身を起して 伊ア一残念な次第じや三人とも敗を取つたか残念至極然し今コレ我面會をいたさければ憶したりと人に云はれるも残念至極病床にて苦るしくなければ之へと申せ 三かしこまりました ア一丸目先生 幾何じや 三只今御師匠に申し上げましたる處見苦るしい病床でくるしくなければ之への仰せでございます 慶ア左様か然らば圓海坊御案内仕まつるでございます 圓然らば御見舞申上んと立上つたる圓海三九郎に丸目の二人が案内に依て御病床に通ると鈍子の釣夜具をしてく

塚 原 ト 傳

よりまくらをして伊勢の守は半面あらはしてゐるモ一座敷に這入るとアんと臭ふのは熱だ香さしの御薬がたへにある圓海ズカクと枕邊に來たる不禮な奴があるもので他人の座敷へ這入る禮儀のあるものでございす立ながらヂツと見て枕邊へくるどひさまづいて 圓之は伊勢の守とのでござるか兼て御尊名は承たまわつたが未だ御縁なくして御目にからん我は出羽が羽黒の修現者信濃坊圓海と申するもの今日の道場に於て御門人衆とれ手合せをいたしたは御痛氣でなくば貴殿と御立合をなすべきに残念でございます余程熱もあられる容子いつ頃から思ひか伊折角を尋ねになりましたが病風にて御挨拶もなりかねる誠とに不禮御用捨て下されヨ 圓イヤ其儘決して起てはいかん病人の貴公を起した爲め非常に病ひが重くなつたなすと云はれると貴公が迷ひいたす其儘大分熱があるやう顔色も憔悴とし



塚原ト傳

て正ただに病人びやうにんと云ふ事は之これでモ一分ぶぶんつて居る何なにうか心安やすこく御養生ごじやうじやう下ください然しかし御心配ごしんぱいなさる程ほどの事こともござるまい拙ちやく者ものも之これより出羽でわへ歸かへるものモ一年いちねんはた尋ね申まをさん來年らいねんは又またね申まをす其その餘あまは最早もともと御病氣ごびやうき御全快ごぜんかいでござらうキツと明年もつねんはた立合たしか申まをすでござらうア一人ひとり人間にんげんは勝手かたてなものたどへ病人びやうにんでも隣となりりより火ひでも出るとか我が家わがやから火ひでも出れば病人びやうにんじやからと云つて床とこの中なかには居ゐられまいハア……若わかしや乱暴らんぱう人があつて明あき込こんで參まゐつたらば拙ちやく者ものは病人びやうにんだと云つて布團ふだんをかぶつて御免ごめんなさりお切りなさいとは云ふまい立合たしかじやから病人びやうにんでも仔細しじゆがな一ひと分ぶん御養生ごじやうじやうなさいアハハハハと高笑たかせうひ伊勢いせの守まもりは病中びやうちゆうとは云へ押おして立合たしかへば立合たしかぬ事こともあるまいダコンナ奴やつに拙ちやく者ものも無益むえきと只ただくやしと思おもひまし一ひと言ことも之これから答こたへをしない圓海えんかいはズツと立上たてあつて道場みちばへ立戻たてかへり圓サアハハ金山きんざん万山まんざん各々おのづから支度しどが出来できたら出懸でかけけやうイヤ御

塚原ト傳

一同御邪ごじや魔まであつた此こゝ身み方かたも修業しゆぎやうの爲ために出羽路でわじへた出でになつたら羽黒はねくろへた尋ねなさい坊ぼくにはいろハ時ときはへものもござる看みはくわぬが酒さけや米こめのゆしは必かならず差上さしあるからたいでなさいまし……ゆしをくわぬと云はぬばかりいろハな事を云つて立歸たてかへつてしまふ跡あとに門人かどにんはくやしがつてゐる就中しゆうちゆう先生せんせいはくやしい御ごトや病氣びやうきでなくば只一本ただいっぽんの元もとに彼かれをうつべきもの今病いまびやうひの床とこにあれば彼かれが廣言ひろげんを其その儘ままにいたしをつたがア一ひと殘念ざんねんな事ことであると思おもひますから猶なほ更病さらびやうが重おもくなる隠かくれたるより現いまはれざるはなしとやらで此こゝの暗くらさが高たかくなる世間よこしまの人は上泉かみいづみ先生せんせいが病氣びやうきでなくば立派たてはに立合たしかをなされたもの惜あはしい事ことをしたと云ふのは二分八分ふぶんはちぶんをとりは上泉かみいづみもモ一ひといけなないアノ山伏さんぶつにれくれを取とつたのだらう氣きの毒どく千萬せんまんと云ふををきこゑる度ほど毎まに門人かどにんどもは早はやく先生せんせいの御全快ごぜんかいになるやうといのつて居ゐます



塚原ト傳

話しかはつて常陸の國塚原では父土佐の病氣もれい〜全快に  
越むくので小太郎も安心をしてモ一四五日の云には出立をして  
先生下へ歸へらんと既に支度に及んで居ます處へ ○「へー今  
日は ○イヤ何うした久しく見へなかつたではないか ○御無  
沙汰をいたしました ○何かめづらしいものがあるか ○べつ  
にめづらしいものもございませぬが二三本御覽に入れませうと  
刀劔屋と見へていろ〜見せて居ます此新刀がよいとか古刀でよ  
いとか此の焼刃で何うであるとか云つて見てゐる處へ小太郎が  
出て来た ○若様は近頃お宅でございませうか 小父の病氣の爲  
に歸つて来たが大分モ一よろしいから明日あたりは上州へ歸ら  
うと思ふ ○「へー先生の御病氣は御存じでございませうか 小  
だれの ○「上泉先生の 小夫は知らん父上の御病氣で當方へ出  
向ひたから先生の事は少しも知らん ○私くしも鳥渡此の間だ

塚原ト傳

参りましたが御存じなければ申し上げます怪しからぬ事が出来  
ましたヨ 小病氣の容子でも悪ひか ○「いゝ病氣ばかりではご  
さいませせんお話し申さなければ分りません出羽の羽黒の圓海と  
云ふ修業者の爲に丸目様に五十簀神宮寺様の三人がお負なすつ  
て夫れからコレ〜かよう〜誠に何うも怪しからぬ事でも  
さいます先生の御病間へ這入つて俺が強ひから作病をかまへて  
立合ないと云はぬばかりな悪口を申した左うでございませう  
んも大變に残念がつて居ましたがだれも叶はないもんですから  
ソイツを無事に歸した左うでございませうが早く先生が御病氣御  
全快になつて羽黒へ出懸て往つて圓海と云ふ坊主をひき目に  
逢はしてくれ〜ばよいと毎日〜御道場は其噂さばかりでござ  
いますとばらくの間兩眼をとちて居た塚原小太郎勝義が夫は不  
禮な奴だ武士が参つて立合をなし勝を得られたならば仔細もな



いが僧侶同様の修現者が参つて四天王の人々が負たとは云は遺  
場を荒された同様の師の聡は門人のほぢなり決して猶豫すべき事  
に非ず此方から羽黒へ乗込んで仇討をしたし此の恨みをばらさ  
なければならぬ之は小太郎が口に出したのではない腹の中で  
思つたのだ父の病氣は快方とはいふながらまだ癒したから其日は其儘に  
ない父に心配をかけてはならぬと思ひましたから其日は其儘に  
すまして翌日に至つて備へた父上未だ御至快にならん内御眼を  
頂戴しては甚だ恐れ入ります承たまはる醫師の伊勢の守が  
病ひの床に臥もたどの事何卒お暇を頂戴いたしませす父へ心よ  
くいとまをもちつて表向は上州へ出立と云ひ心中には彼の羽黒  
へ乗込んで圓海をうたんの考がへ弘治の元年三月の三日即ち  
上己の節旬に父を始め一同に別れを告げて是から出羽の國羽黒  
山へ乗込込のれ話してございませす鳥渡休息をして……

傳も塚原小太郎は出立の後泊りを重ねて出羽の國羽黒山の麓な  
る矢吹村の積き松原へさしかかりました多くの百姓が夫へ集ま  
つてさはいで居升何事ならんど立寄つて見ると七八才の童子く  
らゐると思ふ白猿が高手小手にいましめられて棒を通してかつひ  
で行く夫を見やうとて男女があつまつて珍らしい白猿だ大きい  
猿だと云つて見てゐる小太郎之を見るにツカ／＼うばへやつて  
來て小コレ／＼ね前達は夫を何うするのだ○旦那様コイツ  
は里へ出て島をあらしたり小屋のものを持つて行つたりはし  
たり此頃は夜な／＼人の家へ來て飯櫃を盗んでいきますので今  
日は大勢で以て申し合せてトウ／＼陥し穴へたどしむま／＼生捕  
りましたのでございませす之を獵師にうりましても香具師に賣り

第三席



塚原ト傳

ましてもいくらかまうかかりますから持ていかうと云ふのでござ  
 います 小「香具師と云ふのは何だ ○夫は見世物なぞをいたし  
 ます 小「ハア成程夫へやるのが ○夫へやると云うた處で何處  
 に居るのだから分りません相手の香具師は 小「獵夫へ持ていけば  
 何うする ○殺した上に皮をはいてしまひますコト云ふ白ひさ  
 れいな皮は立派なものになります肉はたいの獲と違ひますから  
 喰つて見てもむさうございませうし又肝はくすりになりいろく  
 繰ひ道のあるものです 小「れ前達は香具師にうるのか獵師へう  
 るのか何方へもつていくのだ ○左うでございませう今申しまし  
 た通り此の山の中ですから香具師なぞも居ません獵師は此の向  
 ふに彌左衛門とんと云ふのがありまして始終鳥けものを捕て居  
 ますから夫へ持ていけば一番早うございませう 小「夫へ持ていけ  
 ば殺してしまふだらう ○左様で 小「何うだ何うせ人に賣るも

塚原ト傳

のながら拙者に買てくれまいか ○「へー旦那様は之を何うな  
 さいませ 小「何うしやう私しの勝手だ何うも生あるものを殺す  
 と云ふのはふびんなものである然し此の白猿も悪事をいたした  
 ものであるから其罪の爲に殺されるのも仕方もないが願はくば  
 助けてやりたいまだしも香具師がつれていけば彼の爲に利益を  
 與へるから喰物をくれ大事に養なはれて命に別條はあるまいが  
 皮をはがれ肉を喰はれるは如何にも不憫何うか拙者にうつてく  
 れ ○旦那様いくらにかいませ 小「お前方でいくらに賣るのだ  
 ○夫がね香具師にうれば高いので獵師にうれば安いのですソコ  
 デ今考がへて居る處なので 小「夫では早ひ話しがいい獵師に賣  
 る倍出さうしやアないか獵師にうればいくらになる ○左うで  
 げすア三貫か五貫にはなるつもりで 小「夫では三貫の倍は六  
 貫何んにせい小「判一枚で俺にうつてくれ金一兩出さう各々



塚原ト傳

を見合せたが ○「ヤ、何人居る ○「八人だよ ○「旦那様八人で  
ございますが一、人前小判一枚づゝ下さるのですか 小馬鹿を云  
へンソナにやる奴があるか 慾ばつてゐる小判一枚やるから夫を  
分配する ○「大きに何うも有難ふございます其頭の一兩金はた  
いしたもので百姓どもは悦こんで有難ふございます香具師にう  
た處が一兩にはなりません何うも有難ふございますイヤ、猿仕  
合だ旦那様に買つて貰やアがつた夫では旦那御引渡し申します  
小此の細をどくと猿が飛出すといかんわのまゝで引渡してく  
れる ○「此の細引は私しのですから取られあやア困ります 小  
恐ろしい慾張つた奴だヨシ、細引を解ひて夫ならばかへすと  
懸て小太郎が細引といてやると飛出しもせずなわをどかれても  
忙然としてソコへすわり兩手をつかへてチヨコ、おちぎをし  
てゐる人前と進み獸類と云ふが可愛もので、○「サア、いけ、

塚原ト傳

金をもらへば用はないと田舎の人は正直だぞん、かけてい  
てしまふ猿の顔をしばらくながめて居た小太郎、小細あらばこ  
そ貴様を助けたのだ凡て動物は野に棲むものと山に棲むものと  
の區別がある汝は山に棲めば山に食物があらう然るに人家に近  
き處へいでゝいたづらをするからかやうな事に逢ふのだ以后心  
得違ひをするナサ助け遣はすから往けと向ふへ押し放しますと  
別れを惜しむか兩眼に涙をうかべて泣いてゐる猿や其外のけもの  
の聲は分が分りませんが人間の言葉は彼に分つたと見へて只ヒ  
ヨコ、頭を下げて居た例の自猿しばらくの間小太郎の顔を見  
て居たが何に思ひけんキャツと一發發すると共にかたへの木へ  
スラ、と登りました楮は別れを告げるかと思つた小太郎ヨコ  
く、笑つて當地を出立いたしました猿は何れへ参りましたか其  
後は分りません此方は彼の猿を助けて心の中にア、善根といふ



塚 原 ト 傳

の心持のよいものである得んと欲せば與へよと云ふ彼を助け  
て善れと得やうと云ふやうな卑しい心でした事では決して善根  
にならない惻愍の心なきは人に非すと云ふ事がある成程陰徳と  
云ふ事は誠に心持のよいもので川へしすみ流すが網でもなが  
すと其日は何だか心持のよいものでございませす小太郎は段々此  
處を進んで名代の羽黒山へ近づいてくると成程日本に名山もあ  
またあるが中にも有名な靈地でござますから中々容易な山では  
ないしばらくの間山を見上げて居る處へ恐ろしひ大きな柴を背  
負て下つて来た一人の木コリ小太郎の前を往すぎやうとしただ  
何に思ひけん立止まつて ○旦那は何處へお出になるのでござ  
います 小お前は山稼ぎの人か ○ハイ 小此の信濃坊と云ふ  
のがあつて圓海と云ふ修現者が住で居られると云ふのをきいた  
がとるか ○コ、ハ何坊と云つて澤山坊がございませすか信

塚 原 ト 傳

濃坊の圓海なんと来た日には大したもののでございませすまゝで山  
伏の境界じやアございませせん近所の小さい大名は叶はぬくらゐ  
大きな道場をこしらへて稽古をやつて居ます處少劍術と云ふの  
もあり柔術と云ふ事もあり弓矢鐵炮などと云ふ皆な術だ左うで  
ございませすがアノ人は金剛杖と云ふ山伏さんが持つて居る杖です  
夫を振まわすので鹿島香取へ祈誓をかけて鹿島流と云ふ人が近  
頃評判でございませすが之は棒には違ひございませせんが金剛杖と  
云ふ八角にこき上げた大きな六尺もあらふと云ふ棒でございま  
す夫で鐵砲や弓には叶ひませせんが槍でも刀でも打ち落とすと云ふ  
大層な勢はひでございませす且那様は何處でございてれいでませつ  
たかしらないが見れば年も若し山に登つて圓海なんと云ふ無法  
ものに出逢つた節には危うふとございませす惡ひ事は云ひませせんか  
ら君子は危うきに近よらぬと云ふ事をた寺のお説教にきいた事



塚原ト傳

がございます御歸りなすつた方がよふございませう 小「イヤ  
万悉しけけない其圓海と云ふものは此の山の何れに住でる。○  
ちき此の先でございます。且那お何才でございます。小「失禮な  
事を云ふ類當年十八才じや。○私しの件と同年はなりませうが  
年は同ツでも躰格がエラア違ひます私の件は野良稼ひで山へ  
籠來を取りに往き候してもたれモ一無暗にさはいで居りますが  
旦那様は決して圓海の處へゆきなさるナヨ。小「イヤゆかなけれ  
ばならんもの親切は悉しけけない決して汝の言葉を背くものでな  
い何う参ればよろしいか致へてくれる。○夫ならば御致へ申し  
ませう此の櫻の木のスツとわつて居りませう森のやうに繁がつ  
て居る夫を往つてのぼると庚申堂がございます青面金剛が建  
居ます其庚申塚を左りへまがつて一旦谷へ下りまして夫から左  
りの流れについて段々登つていくと又狹い道へ出たらダク

塚原ト傳

下りになつて居る處を左りへとつて往くと大きな家の屋根が見へ  
ます夫が信濃坊の住ひです圓海が居でございませうが必らず向  
ふで進めても立合をなさらない方がよふい升用事だけ違つし  
て籠まつてお歸んなさいまし老人の親切な言葉悉しけけないと禮  
を云つて教への通り平地とは違ひまして山路と云ふものはなれ  
ぬ人には随分あるさにくいものつ先上りは膝をいたため下り坂  
は腰をいためると云ふ通り或いは登り又は下り致への通り來て  
見れば彼の庚申塚ハア一之れじやア青面金剛童子先の日は彼  
の白猿をたすけ今日は又庚申塚へ参詣する彼の猿と云ふけもの  
は庚申のつかひゆめと云ふ事をきく及んだ之縁でわらふと彼の  
庚申堂の前で禮拜をして武運長久を祈つて段々效しへの山道  
を登つて來て見ると成程かゝる山には珍らしい立派な家修現  
者が住と見へまして正面が玄關かたわきの柱に信濃坊とかいて



塚 原 ト 傳

ある 小御頼み申さす ○「ドール出て来たのは惣塚でデク  
した奴が ○「何處から見へた 小拙者は常陸の國のものでござ  
いさす少々武藝の志ろさしのあるもの麓において承たまはれば  
常山の信濃坊圓海と云ふ人が剣術とやら又より棒とやらを工風  
なされたと承たまはり幸はひ拙者も修業中のもの一本の御相手  
を願ひたいものでございます ○「アハ……一本の手合せをした  
いとコレ螻蛄が斧を以て龍車に向ふと云ふたとへがある圓海に  
手合せを願ひたいと何うも世界は廣ひ馬鹿は多ひつゝやらぬ事を  
云ふナさはらぬ神にたよりなしと云ふ事があるが下山しろ私し  
が情けで歸してやる他のものが出るとなぐさみに道場へ引張り  
込んでドンナ目に合ふか知れん立合なすと云はんで歸れ 小イ  
ヤ左様でござらん修業の爲に参りましたもの元來圓海は大層強  
ひと云ふ事をさいて居ます圓海様と立合を致さんと云ふので

塚 原 ト 傳

はないかゝる衆傑名人の先生の顔なじみともなり又れ手づか  
ら御教授に相成りますれば身の仕合でございます何うかよるし  
くれ取次を願ひます ○「左うかマア仕方がないしばらくまで與  
の間へ入ると今度は若い修現者が出て来た ○「れ前か今來たの  
はさししにまさつた小さい奴だいくつになるナ 小拙者の年齢  
をたしらべ下さるには及ばん圓海どのへ何うか取次を願ひま  
す ○「何うも貴様のやうなものゝわからぬ奴では仕方がない之  
へ通れと云つた處でわらじのまじやわ仕方がないソコにたら  
ひがある其横にまがると貸があるソコで足を洗つてくるがい  
算のものとへ来て足を洗つて案内にしたがひ上つて見ると成程立  
派な家を山の中へ作つたかと思ふやう廊下づたへに段々往と延  
に八間まがつて六間夫を通つて道場へ出かけてくるといかに  
十二間四面の道場八間四面の道場と云ふ事はよく同業者が由し



塚原ト傳

ますが眞に十二間四面柱らなしと云ふから實に立派なもの一  
武蔵者の家は八幡大武神がはつた處で天照大神鹿島の神をまつ  
るとか或ひは熱田の神をまつるとか大休武家をまつる神と云ふ  
ものは八百方神のりでも極つてゐるもの然るに流石にコ、は修  
現者の家正面に不動明王の像を安置して前には唐金をもつて作  
りし立派な香爐に香をたき左右に御幣があつて何か時の花が備  
へてある如何にも成田の御堂に彷彿たるやうな有様集まる處の  
修現者は夫へ進みいでる小太郎の顔を見て居る處へ身の丈は八  
尺もあらずと云ふ大兵な圓海白繪子稻妻形の衣類に白純子の巻  
き帯をして手には一尺五寸もあらずと云ふ鐵骨の扇面を持つて夫  
へ来た。〇ニ一貴公か常陸から来たと云ふのはこれへ參れ名は  
なんと云ふハツと考がへた塚原小太郎と云ふ事は少し申し兼ね  
ます小太郎と云へば父の名も出るし且は先生の名前も出る何と

塚原ト傳

云ふてよいかとしばらくの間考がへて居た。小拙者は常陸の國  
の住人。圓常陸の國の住人。小何んと申しましたか拙者の姓名  
は圓此の奴郎自分の姓を忘れる奴があるか。小拙者は不動與  
太郎と申します。正面の不動を思ひ出して與太郎と云ふのは  
をかしい流石は圓海此奴年に似合ぬ出来る奴と見へるヨシ骨  
しのくだける程打すへてくれんと圓海が圓ヨシ與太郎然らば  
手合をいたしてくれん然し何れの道場へ參るとも道場には道場  
の法があつて門人の立合ぬ中はその師たるべきもの立合ふもの  
でない依つて門人に二三名と立合つたる后此方が手合せをして  
やらう。夫でよいか。小ハイ元來修業の身上の相手をたれかれと  
は撰みません私くしも貴下と立合ふと云ふものではございせん  
兼て承だまはりまするには修現者と云ふものは不動明王のかた  
を取り悪魔を退治し又は降伏をなさるゝの職務であるが然る



塚原ト傳

に金剛杖を以て人をうつと云ふをわみだしたと云ふのは是迄に  
承たまはらぬ事尤珍らしき人珍らしきものを奇人と云ふ其奇な  
るれ人に近附になりたく且は其金剛杖のふりかたを拜見に  
つたもの貴郎が立合をなさらんければ御門人にてもよろしい  
何うか御相手を願ひます尤も御門人に拙者が打ち勝ましたな  
らば何うかた相手を願ひます 圓未熟もの多分際で何をツベ  
べしやべつてゐる誰か出ると云ふ言葉に従ひ下野坊海山……  
云つた處が角力取ではございませぬ此奴六尺にあまる大兵例の  
金剛杖を小脇に抱ひ込んでツカ〜と前へ出た ○小童支度が  
よければイザ来たれ 小イザと云ふと彼の用意がたした袋の中  
から取り出した天草樫の木劍ヤツとばかりに前へ進みました流  
石は師匠の真影流を捨て自からト傳流といふ流名を日本全國に  
廣める一派の先生です身体の運び彼の木劍のふりかたとして

塚原ト傳

孫はございませぬうばに見てゐる圓海がコイツ中々容易な奴で  
ないと思ふ間に彼の下野坊海山ブン〜どうなりを生じて打込  
んでくるをヒラリ交して二三合打ち合せると思ふとねどり込ん  
で彼の則ち金剛杖の真中をエイボキン只一打の元に打ち折つ  
た海山ヒヨロ〜として動と倒れた其跡へ飛すさつて跡は誰  
方でござるうばに見て居た處の一人豊前坊信山同じく金剛杖を  
打ふりながら二ツになれど打込んだコレなれば豊前坊が筑前坊  
でもなんでも来いと同じく打合せの間だに今度は横に拂つた小  
太郎の木劍の爲に手元を放れて金剛杖は向ふの窓に飛で往てカ  
チリそばに見て居た奴が ○あたりし窓でござい 圓ひかへる  
ハツと云ふ内に怒りを生じたる彼の圓海のけ〜 此方が相手を  
なしくれんと同じく金剛杖を打ふつて小太郎を望んで打込んで  
くるを跡へ飛下つた塚原体をちいめて彼の木劍を持って圓海が下



塚原ト傳

眼を望んで肉もはれよ骨もくだけよとばかりにヤツと打込んだ  
る早業アツと云ひさま夫へ倒れた流石の圓海氣が遠くなるばか  
り漸やくの事にて夫へ手をつかへてウーン汝は元來何ものだサ  
ア姓名を云へ 小だまれ我れは不動與太郎に相違ない起上るな  
ら起て見よと云ふ内に此方は再び金剛杖に手をかけて起上ら  
うといたしたが何分にも急所のあたりをひそく打れさせたが故  
起上る事が叶はない此の時多くの門人各々金剛杖をふつてく  
るとグルと取巻たサア汝本姓を名乗らぬ中に於ては決して  
當所を下山させんと云ふ時小太郎は莞爾笑ひ 小汝等の師に  
打ち勝つたる上は最早望みもなし姓名をきよたくばきかじやら  
う過日此の圓海は上野の國策の輪に至り先生御病中であるに懸  
口なして立ち去るの趣き此方も上泉先生の門下の一人其時に居  
り合せしならば圓海を歸へすに非ず折合さるが圓海の仕合當方

塚原ト傳

の遺取急ひで常山へ罷り越し立合を望みたれを勝負は時の運  
と云へる事もあり圓海の爲に敗をとるときに於ては師の尊名を  
汚す故わざと偽名に及んで参つたる予我こそ伊勢守秀綱が末弟  
塚原小太郎勝義と申するものなりサア汝等のかたきと思ふなら  
ば參れ木劍を持って打合せるは稽古の爲然るに汝等恨みあれば法  
印現者たとへ山伏なりとも相手は撰まんイザ參れと木劍夫へ  
投げだして兼て用意に及んだる城州の一刀を引抜ひて前へすい  
と進み出でたり偕は有名の塚原であるか小太郎である服すなど  
云ふ内にも肝心の圓海が立上る事が出来ない之を師の恨みをは  
らす時なりと思ひましたから小太郎は四方八面に切まくる見る  
く中に十二三名切て落した彼の盡々たる道場も時ならぬ紅葉  
を散らしてからからくれなる小太郎勝に乘じて同じく前に切込  
んで來る處に向ふからヤツ云ふ聲もるともに投げ込んだ三尺棒



場原ト傳

小太郎の左りの股のあたりへあたつて足をすくはれたから叶はぬはづみと共に動と仰向さまに倒れる處をしめたと飛込んだ山伏も七八名のものが手取り足とり高手小手にいましめられた時に圓海ホツと息をついて圓イヤ一同のものしばらくきて夫にて此方も安心を致した此の上からなふり殺し活み殺しみ只今までの恨みはらさなければならんぞと足と手をうしろさまにしはり其儘にして彼の天井よりつるしあげたがサア例にしる死骸や怪人を取片附なければならん其上にて悠々と恨みをばらしてくれんと云ふ内にムヤ薄ぐらくなつた夫れ蠟燭よ松明よと各々あかりをつけて居るが當今のやうな瓦斯やランプのあかりと違つて何となく薄ぐらゐる師匠圓海は怪人をして居から之をかつひで一と問へつれて来て療治をする明朝に至つて彼を殺すでございませう今宵はつるし置て苦しみをさせ我々の恨みをはら

場原ト傳

すと一同の者は食事にかゝるしばかり上げられたる小太郎は少ア一殘念早く圓海を切るべきであつたもの一步の遅れたが誤まり彼を活して以て我れが先に死ぬるは残念左りながら然し戀らし道はしたらば以後は再び圓海世の中へ出て悪事を致すまい又諸方の道場へ参つて乱暴も致すまい今生の望みは足りた最早小太郎の生命は十八才が死ぬ時であらう今更何恨む事かはと平常心得のある人は未練と云ふものはない明朝はアノ修現者どぶの爲に一命を取られる事と覺悟をしてゐる一同の奴は勞れもあがりまは死人怪人もあるから夫をかたづけしてわア、騒ひである  
○イヤナ役だナ番な  
てねそれ朝になれば死人の葬らひもしなければならず又先生の御介抱もしなければならん我々は此方に用があるからお前達二人は御苦勞でもアイツの番をしてたくれ  
○イヤナ役だナ番な



塚原ト傳

予をしなくつても大丈夫ア一やつてしばつてあるのだもの逃げやうと云つた處で逃げられるものではない。〇「けれども用心に如く事はなから。〇「モ一何者だらう。〇「左うさ今ついたのは四つだ。〇「モ一左うなるか今日がくれたばかりだ左うはなるまい。〇「先刻から話しをして居る間に大分時間がたつたじやないか。〇「モ一ボツ。出懸けやうと彼の林山に常山と云ふ二人の山伏が道場へ出て来る。此方は小太郎勝義が最早死ぬ事と覺悟をしてゐる中にバラとだれかくる容子。小「ハハア一明朝とも云はず今宵の中に我を殺しに来たのか何ものなるかと見てゐると彼の窓から来たのは昔し話しの呉空がふいたるものもかくやと思ふばかり多くの猿がやれてゐる窓から這入つて来た大きい奴が上になり教ひて段々と猿がつみかさなつてトウ。小太郎のつらさされて居る女

塚原ト傳

わをきつて其處へだいて下したは實に夢に夢見る心持如何なし。つるにやと思ふ内に入りましたる戸を排ひて多くの猿が小太郎の身体をかついでドン。谷間の方へ来たり流れの水を手に受けて香してくる親切は忝じけないけれども随分なまぐさい心持の悪いもの。小「借は先に助けてやりし猿猴が其恩を報ゆる爲我を助けてくれる事か忝じけないと悦こんで居る處へ何處から持て来たか大きな鉢や或ひは辨當な子を夫へ持て来ましたが取られた者は驚ろいたでございませう前の處へならべて於て多くの猿はヒョコ。れぢきをしてゐる。小「ア一有難ひ忝じけないと漸やくコ、デ食事をしてホツと思をつき暫時休息をしてゐると春の夜の短かく東がしらみ渡りました以前助けたる白猿が顔と見へて小太郎の手を取つて谷間を段々行くから彼が案内に任して凡そ半道ばかり来ると岩窟があつて中を見ると新らしき雄



塚原ト傳

を敷いて廣袖やうなもの一枚彼の猿が之へお通入りなさい云はぬばかり案内に従がひ之へ通入つて休息をいたして居るやうとは知らない林山に常山が番をしやうと道場へ来て見ると何が排ひて居て肝心な小太郎が居ない繩も解ひて切り捨てある林「イヤ！大變だ小太郎が居ない何うして逃げたらうか鳥でなければ天へも登るまい魚でなければ水中へもぐれまい大變だ云ふさわぎ一騎夫へ駆付け付てソレ尋ねると手分けをして探したる人間の行べき所でない谷間へ猿がつかれていつたのだから知郎漸やくての山中に療用を加へて再び彼の信濃坊へ切り込み多くの修現者を殺すと云ふお話し例の如く次席に譲りて委しく申し上げます……

塚原ト傳

借て小太郎は岩窟の中で猿の介抱を受けて日々を送りましたが此の猿と云ふものは随分賢こひもので今西洋で多く推らへる葡萄酒と云ふは猿が發明をしたのだらうで支那でも雀が竹の間だに米を入れてさうして水を入れ酒を造つたが故に酒は酒と云ふ字だ或ひは笹と云ふのも此の意味のあるのだなぞと云つて居ますすが彼等は人間と違つて無欲で天然物を製造するのでございませす既に美濃の猿の温泉なすは佐平次と云ふ百姓が山へ柴を薪に参りまして見て居ると向ふから猿がヒョコ／＼出て来て竹の杖をついて池の中へ兩足を入れて夫をあたゝめて居る先づ當今の時間で云へば二三時位はかくしては杖をついては歸る佐平次も妙に思ひまして翌日も又柴を薪について之を見て居ますと

第四席



傳 卜 原 塚

不思議にも以前のからだになつたが杖にはなれて駆け出して舞  
りまですッコデ佐平次が考がへた之はアノ池の中に何か薬を舍ん  
でゐるものに相違ない畜生は物を云はぬかはりに悟りが早い  
ら何か考がへた事であらうと右の池の中へ手をつツこんで見  
ると温泉と云ふ程でもないが只の水でもない、ツ日向水ぐらゐ  
あたふまりはある之は温泉だ醫者様へでも知らしたらもうか  
だらうと云つてゐると自分の明友の樵夫が木を切つてゐる間に  
彼の斧の首が飛んで其の柄で自分の向ふ鴈をポント打た  
一痛いと倒れた處へ恰度佐平次が往き向せて 佐何うした熊右  
衛門 鴈飛んだ事をやつた見てくれマア自分の道具の柄で向ふ  
鴈をぶつてア一痛い起上る事が出来ない 佐マア待て俺がい  
薬を見付たから今持て来てやる待て居ると云ひながら辨當箱の  
になつたを待ていつて例の水をくんで来て之を手拭ひにした

傳 卜 原 塚

して痛み所へあてがつてもんでやると忽ちちの間に癒ると云ふ  
譯じやアないが少し痛みが樂になつたやうだ 熊此の薬は何ん  
だ 佐實はコレ コー云ふ譯だ熊右衛門悦こんで夫れじやア  
俺がいつて足をつけやうと佐平次に手をひかれながら右の池へ  
来て片足をつけて日が暮る迄居た夜になつては是れから其日  
は熱つて是から荷ひで右の水をくんで来て之を家で洗して段々  
足の痛み所をあたまめてゐると日ならずして全快をした之を  
の温泉と云つて美濃の名物になりましたが先年の地震で埋もれ  
てしまひ美濃の早川何某と云ふ御醫者が惜しいことをしたと云  
つたと云ふ事を聞きましたが猿の温泉と云ふものが美濃の國に  
其の昔あつたと云ふ事です是等は何う云ふ處から考がへたもの  
か 聞ても知らない事を知ると云ふ左れば此の猿も小太郎の恩に  
成じて何か薬になる草の根などを持つて来てくれまして夫れ



塚 原 卜 傳

で小太郎も自分のいたみ所の療治をして漸やく全快を致しまし  
た左れば身体が堅固になれば再び信濃坊へ切り込んど云ふ心  
を早くも悟り交したかいつのまにか小倉の袴に縮緬の裮三尺や  
うナものを持って参りました小太郎大きに脱こんだ依は我に助力  
をしてくれるか千万添じけなひ我れ世の中に名を上げた以上は  
彼の白猿を以て刺と交つりくれん此の返禮をせんければならん  
と心に誓つて再び彼の谷間を立出交したスタくあゆんで参  
りましたる道は分りませんが一度でも通つた處を忘れる人では  
ございません漸やくのことにいたして目ざす信濃坊へ参り交し  
た

塚 原 卜 傳

したから寐てもよふございますか 圓皆な一同寐てもよからら  
○御免下さいましと云ふどかたへの切戸をひらいた之れ幸はひ  
と云ふので兼てコレへ潜んで居た小太郎ヒラリと飛び上るハツ  
と能ろくトタ腹上より眞ニツ非常の物音にコレソコに居るの  
は銀山ヒヤアないか何うしたと云ふ中に障子をはなして 小  
僧圓海眼をひらけ先に汝等の爲めに取り押へられ既に一命危う  
き處を神佛の加護に依て今日まで命永らへたる塚原小太郎勝義  
なり汝如きものを生置ては衆人の迷惑天にかはつて誅獄いたし  
くれんと云ふより早く腦上より切り込ひ一刀アツと云ふ間なく  
圓海は床の上で眞ニツになつた……之も壽命のゑんかいナと忽  
ちち命の終つた容子傍はらに居た數名の門弟どもコレはと云つ  
て逃出す奴を跳り込んで其處へ算を乱して切り倒す猶是から弟  
子どもの集まる場所へ来て見ると彼等は宛然山賊同様酒を呑ん



傳 卜 原 塚

で寐て居たが足音に目を覺して見ると小太郎でございます。〇「イヤ汝はと云はせもあへず跳り込んで切り始めた……毎度御話しをする通り人田が殺されると云ふのは何んでもないやうだが切ると云ふのは随分六かしひ中々一人切れるものじやアない」と云ふ事を能く同業者が申しますすが決して居らではございませぬ腕の出来るものが人を殺しますのは瓜を切るより尤も安いで集まつて居た三十余人を悉く切り倒してしまひ彼の信濃坊の本堂へ来たつてしばらくの間御本尊に禮拜をして小本堂を汚し奉まつり恐れ入り候へどもかゝる汚れし堂を殺し置きませれば臆ては山賊の住居をもなり領民に害を興へませう故只今此の處は焼捨以後の憂いをものぞきます間何卒御免し下されたいと云ひつゝ三ヶ所へ火をはなしたから炎々と見るゝ内に燃へあがつた小太郎之より所の役所へ訴たへいで法通りの所分を

傳 卜 原 塚

むらんど云ふ覺悟で此の本堂の燃るを松火として段々麓へ下りましたが何にしる之れ迄食物と雖も猿が送りくれるものですから滋養のあるものでもなく殊に手疵いたみの養生をしても未だ快氣と云ふ程でもないので大府勢れましたから夜道はあまり能くもあるまいと二三里も来たつてかたへの辻堂へ這入つて此の中で一泊をせんと勞れたまふにトロと眠りを催はして居る處へドシと云ふ足音は我が跡を尋ひて之れまで来たらしし圓海の余類の奴かと思ひ格子の間から覗いて見ると左にあらす大きな長持をかついて十五六人の曲者が之へやつて来た。〇「頭何うしませうの。〇ソコへ下して女を出せ。〇「へエーと云つて長持の蓋をひらいたを見ると美しくしき十八九の女が猿轡をはまされ高小手に縛しめてある忽ち繩をといて彼が着て居る紅梅の下着に白無垢を悉く脱して頭を着て居る廣袖をさ



傳 ト 原 塚

せ九 縮緬の 蹴出し一ツの上へ 廣袖をさせたは 余程妙だ女は 猿ぐ  
つはをはめられてゐるので 物云ふ事少出来ない 再たびコレを長  
持の中へ入れる 小太郎は何をするのだらうと見て居ると後から  
かつひて参りまゝた 鶴の中へ娘の姿をした 頭が 遣入つて 頭木  
丈夫だ夫れ 往け長持を夫へ置たなりに 彼の 曲者どもは 元來し道  
へ引返へす 凡ろ道の七八町も 来たらうと思ふ 時分辻堂から出た  
塚原小太郎が 長持の 蓋をばらひ中に居た女を引出して 猿轡を取  
り 何うした事かと尋ねるよりも 先にフツと一聲泣き出した 小  
コレ氣を 確かにもて 拙者は 怪しひもので はない 身の上を物語ら  
つしやい 及ばずながら 御助力にも ならう 賤しきものゝ娘とも思  
はれぬがと 問はれて 女は 女有難ふ存じます 羨くしは此の向ふ  
の水戸村の 百姓 田中吉郎 眞衛の娘でございませす 實は 福富村の 郷  
士 福富喜右衛門と云ふ人の 倅猪之介と申します のは 當年二十一

傳 ト 原 塚

才夫は 其の昔しの 業平様も なんのその 廣ひ世界に 二人とも  
ない 殿よりを 尤しらしいと思ひうめたが…… 小コレ 何を  
云つてゐる 女「イエ本統の御話しでございまして 其の中に思へ  
ば 思ひ思はれるとやら 小此の女は 氣違ひだ 沈棒に 盗まれて 來  
て 義太夫を 語つたり 一中節をうたつたり 余程かはつてをる 女  
イエ氣違ひではございません 實に 思ひあつて 居りましたを 親類  
の 興三右衛門が 妾しの心を 察して 親どもへ 告げて 夫婦にしやう  
とした 處一人娘に 一人の 倅養子にも やれず 嫁にも やれないと云  
ふので 一時は 互ひに 涙にくれました が 若しや 二人が 不丁節でも  
出しはせまいかと云ふ 處ろから 妾しが 嫁に 往くと 極りまして 惡  
々 今日が 無禮の 晩支度を いたして 鶴に 乗り出やうと いたしまし  
たる 處へ 只今の 盜賊アレは 此の向ふに 住居を いたす 山賊で 大蛇  
太郎と云ふもので ございませす 夫が 妾しを 盗んで 衣類をはぎと



塚原ト傳

まして是から福宿様へ忍び込んど云ふつもり口には後辯をはり  
られて居りますが耳はあきらかに聞こへます後等々のたくみを聞  
き取りました永年の間貯蓄なされた金銀を彼の盗賊どもに盗ま  
れては大出殊に夫猪之介に若しや誤まりでもあつてはなりませ  
ん何うぞ御武家様御助けなされて下さいと言葉せわしく物詰り  
を聞て小太郎しばらくの間だ女の顔を見て居ました女は  
感心な奴だ未だ結婚の盃をあげざるも夫を思ふ情と云ひ男を思  
ふ心と云ひ如何にもあはれに聞へる助けてやらう拙者も今慈僧  
どもを殺して参つたもの之れよりは上の御處をを受ける考がへ  
ながら一人殺す二人殺す味にかはりはない其の盗賊を退治して  
やらう汝は此の辻堂の中に隠れ忍べど女を辻堂へ隠して小太郎  
は段々山道を下りました  
御話しかはつて此方は福富村の喜右衛門の宅では今夜は嫁がく

塚原ト傳

るのでワイ／＼騒いで居る處へ玄關へ忍がついて其の中から現  
はれましたは美々たる衣類を着用いたしたる花嫁四五人のもの  
に伴なはれて座敷へ通る夫れ御嫁さんがと一同さはぐ内に女中  
が ○オヤ／＼人間と云ふものもどる時にはよどるものじや  
アございませぬか此の間だ妾しが鳥渡御見上げ申した時には大  
層やさなたな様でございませぬか今夜は大層大きくなつた  
とじやアございませぬか ○夫は前さん此の三四日雨が降り  
ましたから…… 笛じやアあるまいし雨が降る度にふとつて堪  
るものか媒嫁人奥三右衛門が嫁の手を取て夫へ座らせ野の猪之  
介を同じく向ふへ坐らして三ツ盃の女蝶雄蝶銚子を携さへたる  
は男女の童子今や三々九度の儀式に及ばんとする時冠ぶら帽子  
をなげるや否や猪之介の手を取てグイと引よせる之はと驚ろく  
座中の者をにらみつけて足下にふみつけ ○一同の奴郎節かに



塚 原 ト 傳

しると云ひながら乗て懷中に用意なしたる一刀をスラリと引抜  
き ○「サア此の家の奴等たしかに聞け今夜嫁がくると云ふのを  
聞て其の妻に化けて這入り込んだは永年の間だ時はずた金も  
らたいと云ふ俺の計略ぢたばたすると片端から死人の山だ予今  
此の近邊に隠れのねニ大蛇太郎とは俺の事だサア命がほしけり  
やア金を出せと大聲で怒鳴ると共にバラ／＼と乗り込んだ小賊  
ども主人喜右衛門を始め親類の奥三右衛門に落之介の三人を  
ル／＼と取り巻たコレはとばかり驚ろひて一同生た心地もなく  
只忙然と居ります折から裏口の戸を開いてノソリ／＼と之へ道  
入つてくる一人あり猪之介を人質にした大蛇太郎が見ると誠と  
にやさしげなる小兵な男だ三尺にあまる一刀提さげてズカ  
と進みいで ○「其の方が大蛇太郎か 太汝は全体何者だ ○「見  
られる通り人間に相違ないサア其の猪之介を助けてやれ若し聞

塚 原 ト 傳

き入れざる時に於ては其の方の命がないぞ ○「エイ面倒だと云  
ふと大蛇太郎が立上らんとしたる處をヤツと投げたる手裏剣  
は彼が腹中へ中リウンとばかりに倒れる處を飛び込んで取つて  
押へて猪之介を引起して 小當家の主人驚ろく勿れ常州の郷士  
塚原土佐守が次男小太郎勝義と申するもの先刻水上新喜右衛門  
の娘に出會當家の大事を承たまはり助けの爲に飛び越したり決  
して驚ろく勿れと云はれて一同は大きに悦びました小太郎は  
此の大蛇太郎を縛り上げる此の勢はひに遊易して小賊どもは只  
忙然として居るをかたはしより取つて押へ翌朝代官の奥村半太夫  
のもとへ此の段を訴たへ出る猶ほ圓海を斬た事を告げました  
元來小太郎は欲の爲めでしたのでは無い諸人助けの爲めにいた  
したのだから則ち斬り徳と云ふ事になりました小太郎は大きに  
悦こんで再び上州箕輪へ立ち歸り此の事を伊勢守へ告げ改た



八  
めて日本全國を修業に出たる留守中思ひきや父の土佐が横死を  
致すと云ふ日本三景の一たる奥州松島に於て仇討をなすの件  
鳥渡休息をして申し上げるといたしませう……

第五席

八  
賊を退治いたしても上役人の斗ひを以て無罪放免されまして今  
は白日晴天の身の上此の機に乗じて日本全國の漫遊をなさんと  
決心をいたしましたから先生の元へも立寄らず上州の坂本村と云  
へ参りました草鞋が切れましたから傍はらの茶見世へよつて  
小「コレ親父草鞋を一足くれる 老旦那様湖ひのがようござませ  
うか厚ひのがよふございますか何方がようございます 小「何方  
でもよい大丈夫なのをくれ 老夫れじやア旦那様湖ひの上げ  
ませう旅なれぬ人は石をふんでいたいと云ふので厚ひ方を好む

塚原ト傳

八  
ますがお丈夫なのは湖ひ方がようございます 小「何でもない  
悪いにはかまはぬから夫をくれる 老ハイ御茶をくんで参りま  
した茶を呑ながら老父が草鞋を作つてくれるのを見て居る處へ  
七八名の若ひ百姓が面々竹刀或ひは木劔を持って通りかよりま  
た小太郎の姿を見て ○「居るぞ 若し侍らひね前様は劔道修  
業かな 小「ハア左様だ ○「左うかね何うだエ俺等は百姓だが劔  
術の稽古をするのだ此の邊に日本一の先生丸目藏人と云ふ人が  
居るだア其俺等は弟子でございます何う一番他流試合と云ふの  
は修業の第一だと云ふがやらうしやるか 小「之は御高名の丸目  
先生のね弟子が然らば一本ね手合せを願ひませう 百ハア左様  
かい、丁簡だ夫れじやア前もものなる所小太郎腹の中であ  
かしいけれども兄弟同様の間だ柄丸目の門人久しぶり彼の  
にも逢ひたいと考がへ 小「私しは修業者であるが生憎道具を

塚原ト傳



塚原ト傳

たん何うかれ前の道具をかして貰ひたい。百かしてやるべし。度々をさつしやいな素面素小手の立合だから怪儀をしてはならぬ。鉢巻をさつしやいな大小を茶見世の此方へ置て今老父が作つてくれましたる。わらじを穿き彼等の竹刀をかり受けて前へ進む一人。徳右衛門と云ふ奴が同じく竹刀を持ってア来い。米れと前へ向つた。ヤツとくるトタンに小太郎面をうたれて。小参つた。〇何うだ。エ弱じやアねへか。小誠とに恐れ入つた。〇徳右衛門少しと。かつしやいなア俺が相手をする。だ今の奴とはちがつてモ一少し強ひから氣をつけるア来さつしやいと云ひながら打込んで来る竹刀に今度は肩をうたれて。小参つた。〇左う弱くつては。しみがないだ。〇待てヨ。今度は俺にうたつせいと云ひながら又一人出るとボカリと小太郎がうたれる。小イヤ何うも誠とに恐れ入りました。〇弱ひ侍ひだナ夫れぢやア物にならねへと俺の

塚原ト傳

庭へ来て二三年も修業をした。少しは物になるだんべ。生。う難うございます。〇夫じやア修業にあるひた。庭がトアモだめだ。肥たごをかついだ方がよかんべい。百姓にからかつて居る。庭へ同ふの方より一人の侍らひ供もつれず。鐵扇を携さへて参つた。小太郎の姿たを見ると急ぎ足に来る。此方は百姓。此の侍ひを見る。〇イヤ先生が来さつしやつ先生様お前さんが平常修業がねへと云はつしやるが俺等はみんな強くなりました。此の若侍と打つたでございます。少し早くれ。出でなさんと見せるのでございます。か小太郎はドンナ先生か。トヒヨイと見ると。小イヤ之は丸目氏でござるか。丸塚原氏一別以來。百アレ先生様。此の人を御存じでございますか。丸馬鹿奴郎。〇ハア何でございます。丸何でもない。年はまだ老られぬが。劍道にかけてはトアモ拙者なぞの及ぶ處でない。大先生だ。〇ハア何でございます。丸塚原氏



塚原ト傳

ね戯ひれをなされてはいかん。小「イヤ、實は此の中少し道中の勞  
 れで肩もこつて参りました。按摩を雇ふより彼等に肩をうたせた  
 方がよからうと存じ、誠に御自分の御門人と承たまはりました。  
 故御面會をするよすがにも、實は鳥渡相手を致したわけ。丸之  
 は恐れ入りました。丸目が町噺に挨拶をして居るのをかたはらに  
 居た百姓が、百先生之が本統に強ひ人でございますか。丸日本  
 全國に名前が、百先生だ然し、貴様どもは仕合せだぞ。云ふ  
 合でなければ御手合せの出来る人ではない。常陸の塚原小太郎と  
 云はれる拙者は同門である。〇「ア、左うでございますか。百姓  
 どもはにが笑ひをして立去つてしましました。丸目そばへ立寄つ  
 て、丸不思議にも御自分に面會をいたしました。が拙者の悦び  
 茲に傾ぶる心配な事が出来て居ます。小「何か御親族。丸「イヤ、親  
 族ではござらん。御邊の身分に關したること。永年の間御指南を受

塚原ト傳

けたる師のれ名前且は新影流の流名にもかゝはり後世の胡塵に  
 もならうかと思ふ。大事件が出来た。小「夫は怪からぬ  
 事ソハ如何なる次第でござる。丸「イヤ、往來に於てはお話しな  
 りかねる程遠からぬ。當村に拙者は住居いたして居る。兎に角道場  
 までね出でを願ふと、茶代を拂つて丸目の道場へ來たる。コ、はつ  
 まらぬ村ではあるが、郷士などの多く住む處で、劍道ばすこぶさ  
 かんな土地見やう見まねでつまらぬ百姓までも其の丁簡である。  
 から割合に道場もさかつて居る。早速すまきの水で足を洗ひ座  
 敷へ通ると例に依つて、敷物成ひは茶菓子と云ふわけ。町噺に取持  
 に取持中に小太郎は年が若ひから氣が短かひ。小「儲て丸目氏共  
 大事件と申するのは、丸「マツ御急ぎなさるナ。唯今よりゆるりと  
 お話しをする。實は常所赤城山に赤城明神と云ふのがあつて之は  
 名代な神社でござる。然るに例年九月の十四日十五日の兩日大祭



塚原ト傳

を行ひまする然る所ろが昔年より仕來りて此の神前に於て士農工商身分を論せず武藝に志しあるものは残らず之へ集つて所謂奉納試合と云ふのがあつて若しコレテ十人の者に勝を得れば當日の第一として赤城明神に備へまする弓と旗を興へて其人を正座に直して神酒を取りまするソコテ三年勝がついて十人に打勝ものある時は此明神の額堂の尤も諸人の目につき安き所へ日本隨一武藝の司と云へる額面を上げる事に相成つてを依て名聞を好むものが近國近在は云ふも更遠國の武士と雖も之をさうつたへたるものは夫へ來て立合をするが九人まで打勝て十人目に敗をとり或ひは八人まで打勝つても九人めに見ぐるしい敗を取るも云ふやうなわけで更に日の下開山日本一なぞと云ふ額を上げるものは一人もない然る所が當所の間庭村の住人間底念庵の遺ひ手樋口十郎右衛門の俸れ十藏光吉と云ふものが當年二

塚原ト傳

十二才昨年まで二ヶ年の間十人に打勝て居まする若し當年に至つて彼の十藏光吉が十人に勝利を得ときは日の下開山日本隨一と云ふ額を揚ぐるに至るは必定實は昨年の立合に斯く云ふ藏人敗を取りました何卒して當年は先の耻辱を雪ぎたいと殊に心配を致して居まするが情けないかな御承知の通り拙者の持病は腦でございます頻りにつゝもりがいたいむまく當日までに此の病ひが全快してくれればよいけれども若し此の病ひの發しましたる時にはトチモ彼に勝を取る事が出来ません昨年敗を取て再たび當年負けますれば藏人丸目の姓を汚すは厭ひませんが師匠上泉伊勢の守との工風なしたる神影流と云ふ流名に疵がつきます夫のみ心配いたして居つたる處然るに神佛の加護なるか今足下に對面いたしたるは實に暗夜に燈火を得たるの思ひ塚原氏何卒拙者にかわつて今回の試合まで御逗留を願ひたい然いたし師な



塚原ト傳

り常流のもの笑ひにならざるやう一層に御盡力を願ひたい如何  
でございませうかと頼むが如く云はれましてしばしの間手を拱  
ぬひて例の小太郎 小丸目氏の臍前ですら失敗をなされたもの  
中々拙者なりの勝べき所ではございせんが彼に負けないうやう  
な工風だけはいたして見ませう彼と互角に勝負をいたしたなら  
ば恥辱はございませぬ不肖ながら小太郎今日よりまだ日數も  
ありませぬ故御厄介を願つて當家へ逗留して當日には勝たすまい  
が負せぬだけの考がへを起して見ませう……信玄の言葉にも  
戦争は勝たぬ必らず負るなど云つた信玄には限りませぬ凡て心得  
のある人は一云ふものだ勝んとするから負る角力なすも勝ふ  
と思つてせき込むと負けとなる碁をうつても向ふが上手と見た  
ら受てさへ居れば負もない吟味とるより賣をしやうと思へは大  
丈夫で……コレハ何の事だか分りませぬ小太郎かく受合ひました

塚原ト傳

が中々むづかしい丸目藏人は悦んで田舎に不相應な取持をして  
居ます儲て當日を待て居ると實に光陰は矢の如くとはよく云つ  
たもの忽ち當日となつた夫れ迄の間だに小太郎が感心な事に  
は彼の信濃坊圓海をうつた事は云はぬ彌々當日も近づいて参り  
ましたから右の支度にかゝるサア當日になると早天から多くの  
人が集まりました則ち之は弘治の二年九月の十四日頗ぶる晴  
天に致しましてソヨソヨ風もない向ふの廣場に於ては多くの幕  
張をいたしてひかへる丸目藏人の幕張の中に彼の小太郎は門凡  
の体にてひかへて居ます然るに遙か向ふに根笹を染ぬいたる幕  
を張りまわしたるは之を樋口光吉の控所丸の中に二ツ引のま  
を張廻したるは武州川越に於て近頃名代の青木丈右衛門白地に  
襷づくしの定紋染出したるは之を諸岡一羽齋其他たれかれの論  
なく家の紋をうめて幕を張り廻はしたるもの凡う十二ヶ所其他



塚原ト傳

飛入りを目掛けたる武藝修業とればしきもの數十人かたへに城へて居るしはらくたつと神官は祭服をつけ同じくひかへましか  
懸て神前に於てはらいを上げ祝詞をあげ式終つて階段近く進み  
いでました最早祭典の式も終りましたに依て例年の通り一番太  
鼓と共に各々場所へれ進み下さいと聲をかけるを相圖にドン  
と打ち出したサア何れも此の勝負見ずんはあるべからず何  
ものが一程であらうと見て居る所へ彼の青木丈右衛門の門人  
玉水三彌と云ふのが進みいでイザと云ふ所へ諸岡一羽の門人伊  
東庄藏と云ふのが出て稍しばらく打合つて居る間に丈右衛門の  
門人が勝をしめたかはつて中村半彌と名乗るものも飛出した此  
の半彌の爲に丈右衛門の門弟が打負る續ひて清水福太郎なるも  
のが出で此の半彌に打勝つ甲が勝てば乙が負る乙が勝てば丙が  
負ると云ふので三番とつづくものがない段々と番數も進んで盡

塚原ト傳

りました此時に相州小田原の城主北條の浪人二階堂權四郎と名  
乗つて出ましたは身の丈け六尺有餘年齢三十二三才と云ふ實に  
筋骨逞ましく威有て猛からずと云ふ適ばれなる武士二間柄の鎧  
を小脇に抱込んで進で出たハツト答へて小西刀藏と云ふものが  
木劍を持ってあらはれいでたがまたく中に負る處へ又々おどり  
いでたが以上九名と云ふものが皆な打負けました二階堂權四郎  
今日の勝負にて全勝を得るは拙者にありと云はぬばかりに四方  
をねめまはしました夫を見たる見物は関の旗を作りてウア  
ど云ふモ一人に打勝てば今日の全勝なりと云ふ處へ水淺黄の  
たすき白綾たふんで後る鉢巻小倉の袴の股立を高らかに取り上  
げ進みいでましたるは何ものなるか昨年まで十人に打勝つて今  
一年を以つて日本随一の額を上げやうと云ふ樋口の若先生十藏  
光吉なり之を見ると見物が若先生くと云ふ 十二階堂氏れ美



塚 原 卜 傳

事でござる拙者は間庭村の住人樋口十藏光吉と申するものでござる。二之は兼く御高名は承たまはりました拙者は二階堂權四郎でございますお相手を願ひます双方禮をいたして左右に別れ此方は三間柄の長道具向ふは例の木劍互ひにしばしの間呼吸をばかつてゐる中にボンと打込む木劍の爲に二階堂權四郎槍の只中をうたれてアツと云ふので跡へ下りました忽ち鎗は打落されたが故負となるイヤ跡はだれだくと見物はさはいで居ます。十「ア跡は何方でござると之をきいて先刻からひかへて居たものが此の一番で數百人を負する勝るとはやりをの人々名流名姓名を名乗つて出る勝矜つたる處の十藏光吉勢はひは左ながら阿修羅韋駄天とよく申しますが全たぐの韋駄天のかけてゐるのを見たものはあるまいしアシラ王の側らひなを見たものもございせんがまづ人間の見た處で云へば稻妻の光るが如

塚 原 卜 傳

くとも云ひませうか實に彼が木劍は目にさへぎらんばかり五名七名忽ちまらの間に負る彌々光吉は九人に打勝つて相手がない今一人打勝ますれば之を以て彌々當年で三年勝通す故日の下關山天下隨一と云ふ紙を上げるのでございます角力でも劍術でも見物の了簡にかはりはない一同は手を叩ひてさはいで居る此時に幕張の中から悠々と現はれたる一人小「アイヤ樋口氏不肖ながら一本のお立合を致す九目の門人仁科與四郎と申するものでござる昨年師匠藏人御身の爲に敗を取りまして申し譯には似たれども少々持病の爲に勞れ居ましたる故當年は是非お相手を仕らんと罷り出まして然しながら拙者若年には候へども師匠の名代お相手を仕る若し某敗を取りますれば師匠藏人跡にてれ相手を仕るでござるコッソリ笑つた十藏光吉。十「之は御可憐なる御挨拶九目氏の御門人と云へば矢張神影流でござらうナ。小「如何



塚原ト傳

にも左様イザ御進みあれと云ふとチリツと一歩夫へふみ出しま  
した。が、劍術と云ふものは毎度連中が申します通り面へ打込むか  
胴へ這入るか小手を取るか或ひは突をかけるかの此の四ツより  
出ないものでございませうが凡て劍術道ひは瞞眼だとか中段だ  
とか云ふ構へをする柳生が片目はつしと云ふ構をして人々に奇  
異の思ひをさした宮本無三四が天地陰陽太極兩儀アウンの構へ  
と云ふので大層講釋師に骨を折らせましたが左りの太刀を下  
て右の木劍を上げて左りの足を上げて右の足一本でたつて他  
ら見るとまるで踊りをやるやうだがソコで右を打込んで居る内  
に左りで彼が得物をはらう右の手で得物をはらつて居内に左  
で切り込むと云ふので是等は二たふりだからコト云ふ事が出来  
る然し他から見るとかはつて居る構へだ然るに今日は小太郎が  
膝へ一文字にかまへ菊一文字と云ふ刀鍛冶が横一文字と云ふの

塚原ト傳

は珍らしい樋口光吉之を見て驚ろいた之は怪ならぬ奴目のくば  
り身体かためを見る時には年こそ若かけれ一方の劍士備ては彼  
れ漫心をして我を輕蔑するか如何なるわけかやうな構へをす  
るか意外であると言ふと不審に心得て居る間にヤツと打込む互ひの有  
様何にたとへん言葉もございませぬ数名の見物は此の勝負如何  
にとかたずをのんでひかへて居る中にも光吉の父十郎右衛門は  
遙かに之をながめてまばたきもせず手に汗を握つて居る丸目の  
門人どもは何うか此の仁科與四郎本名塚原小太郎先生かたせた  
いと思ふ就中丸目藏人はコト小太郎が負けては當流の疵何面  
目あつて門弟に顔を合せる事が出来るかと兩眼を閉て前に祈念  
をしてゐる向ふにひかへし十郎右衛門は悴れに勝たしたいと云  
ふので勝負を見てゐる此方の丸目は兄弟弟子に勝せたいと目を  
凝て居る妙な試合もあるもの稍しばらくの間互ひに油汗を流



塚原ト傳

んばかり打込ひすきがないヤツと云ふ懸壁のみ初めに二三度打  
合つたが後は互ひにすきを見て大草を取て居る塚原小太郎は向  
ふが勝誇つてゐる奴であるから之が普通に立合つてはトテモ及  
ばない負を取るときには前申す通り一人の恥辱でない故向ふの弱  
つて来るのを待てる所が十藏も此の場所へ飛込んでくるもの  
はまるつきり出来ぬ奴じやアない相當に出来るもの夫を九人  
まで相手にして今新手の小太郎に向つた之も劍道麒麟と云はれ  
るくらいに塚原だ樋口も余程骨が折れる自然勞れの出た所  
をデツと見込んだ仁科の塚原がヤツといつて飛込んだが早い  
彼の内に手をボカリハツと思ふトタンにヒヨロヒといたして  
後ろへ動と倒れると木劍が前へ落ちてしまふ小太郎は得物をうし  
るまわして小十藏どの如何でござる 十參つた多くの見物は  
ワツと門の隙を揚げた樋口の門人どもがろばへ来て見るとひと

塚原ト傳

く打れたのではございませぬから別段怪儀もないやうだが十藏  
は惣身汗をながしてツインと云つてゐる水を一口呑んで此方  
へ下る見物一同アアと云ふ聲然るに樋口十郎右衛門夫へバ  
ラと来てつて 十イヤ仁科氏貴公には九目氏の門人でござ  
いませるか 小如何にも左様 父先刻承たまはつたには仁科與四  
郎と云はれたが至たくでございませぬか 小左様でございませぬ  
……夫は本名ではなからう實名がわらうとも云はれない十郎右  
衛門はうらめしげに彼を見たが今一應俸と立合つてくれるとも  
云へない故其儘にして跡へ下るサアモ一跡へだれも出るものが  
ございませぬ神官も十人を負したのでないから弓と銃もやれず  
又額を上げさせるわけにも参りませぬ取らぬ御神酒をたま  
はりました今日はコレヲ以て千秋樂彌々與四郎は神前へ参つて  
禮拜を致しまして一同に別れを告げて其儘に立歸る事になつた



塚原ト傳

九目の悦び何にたどへるものもない今此方へ下らんとする時に  
向ふの矢來の外より深網笠を冠つたる浪人体の男ばらくと來  
たつて夫なる仁科與四郎どのしばらく御待あれ御歸宅を妨たげ  
たるも如何でございませうが末だ夜景までは間合もござればそれ  
がし聊さか龜井流の槍術をたしなみませう故何卒一本の御手合せ  
を仕りたい拙者は近江典勝と申すものでござる 小武藝上にか  
けては相手は撰ばん御懸望ならば仕るでございませう 典勝  
は御迷惑ながら御立合下さい猿原小太郎の仁科與四郎が今九州  
中國に於て龜井新十郎と云ふものが龜井流と云ふ槍を遣ふと云  
ふので大層評判になつて居るが此の男は龜井の門人であるが近  
江典勝と云ふものはさいた事はないけれども相當に出来る人で  
あらうと思ひました早速に案内をする槍でも木劍でも澤山用意  
してありませうから何れでも御遣ひなさいと當人にしらべさせ

塚原ト傳

る之は毎度申し上げる通り他流試合には怪しい道具を與へて勝  
を取るなすと云ふ事があるから當人にしらべさせる委細心得て  
近江典勝自分の心になつたタンポの槍を携さへて立出た一度  
立去りかけた見物を取てかへして之を取る樋口十藏光吉も流石  
に一派の大先生此の試合を見ずには歸られない跡へといまつて  
見て居る互ひ暫しの間位ひ取りをして居ましたが近江典勝が是  
は中々出来る奴である是程の腕前で人に知れないとは妙だ仁科  
とは偽名だらうと考へながら典勝がヤツと一聲突出した槍エ  
いと一聲もろともに與四郎の小太郎がボンと槍のたれ中をうつ  
とタンポがヒタリ地についた之はと典勝取り直す間に飛込んだ  
小太郎は先方の肩口をボンと打つ 小如何でござる 典勝つ  
失禮を仕まつりましたとコガリ笑つたしばらく問だ彼の小太  
の顔を見て近江典勝は九目の門人にコ一出来る奴はない恐ら



塚原ト傳

は上泉の門人にて若年ながら適ばれ名人と云ふ塚原小太郎では  
ないかと考がへた小太郎もコレが龜井の門人と云へば新十郎は  
古今稀なる名人である何うか龜井と一と手合せをして見たいと  
ひ思ひましたコトデ試合が終りましたから小太郎は九自の邸へ立  
歸つて参りました九目藏人は大いに悦び山海の珍味夫へなら  
べて取持ち上座へ小太郎を直して藏儲て塚原氏足下なりせば  
我が流名の恥辱師の爲め門人の爲め實に忝じけなふとさる嬉し  
ふとさると涙を流して悦こんでゐるから小九目氏に悦び下  
されて忝じけけないが今回の試合までもない當家へ参つた節早速  
申し上げたき一事あれども高慢にならんと存じ今日まで差控へて  
居ましたが先日出羽の國羽黒の修現者圓海と申するもの師の道  
場へ見へて師の病中なるを悪口いたしたとの事拙者圓元に於て  
是れまはり師家へ立寄らず早速彼の出羽の羽黒へ乗り込み遂に

塚原ト傳

圓海を討取りました其次第はかやう云ふ次第とありし始  
末を話し一度彼が計器にかよつて生捕られたるを猿猴の爲に助  
けられ夫から切込んだ事を茲に始めて話しをした九目藏人が驚  
々感心をした實に後世恐るべきは此の小太郎適ばれ天下に高名  
を爲さん自分の功に誇らんと云ふは見上げたものと一層塚原を  
尊みました翌日小太郎は九目に別れて關西へ修業に趣き龜井新  
十郎に面會の一條から函根の災難塚原小太郎が原中に苦るしむ  
と云ふ御話し

第六席

扱て之より仲仙道を段々と上京の心江郡山を越へて大津をさし  
かゝつて参りました大津下西に町の河原をくると近江典膳と云  
ふ大きな標札が出て居るふと氣がついた小太郎がはて近江典膳



塚 原 ト 傳

とは此間出合つたもの近江の國に住居をして近江典膳を名乗る  
はふしき鬼に角通りかゝつて其儘往きするも如何と思ひまして  
小「たのむ ○何うれ 小「典膳どの御在宿でござるか ○左様  
小「何うか一本の御立合を願ひたふ存じます取次が内へ遣入つて  
○先生若へ待ひが御立合を願ひたいといふこと 先「小遣でも貰  
ひに來たのだらういくら草鞋錢を持たしてやれ…… ○「エー  
折角に出でございませが先住は御多用で殊に寐る程でもござい  
ませんが御病氣でもあり何うも今日は御立合が出来ません之は  
甚はだ輕少だが御草鞋錢にさし上げます 小「イヤ錢をもらひに  
出たのではない能く御間違ひがある先生御病氣ならば御面會の  
上お尋ね申し上げ且は御門人衆にてもよろしい御立合を願ひた  
い ○「ハイと門人が奥へ遣入つて ○先生中々歸りません貴下  
が病氣ならば門人と立合をいたしたいと申して居ます 先「厄介

塚 原 ト 傳

な奴が來た仕方がない此方へ通せ案内に従がひ小太郎道場へ通  
りまして典膳の出で來るを見ると此の間會た男ではないハハア  
一「諸は此の近江典膳の門弟が偽名をして立合つたのかしら然し  
中々アレだけに門人では出ませぬ此の人物は此間だ者よ  
りも遙かに下つて居るやうな殊によつたらば先日近江典膳が  
龜井新十郎で我が姓名を隠して門人の名を名乗つたものであら  
うと早くも推察をいたしたか左様な事は色には出さない  
小「拙者は東國に於て聊さか神影流を學ぶ仁科與四郎と申するも  
のでござるが一本お立合を願ひたうございませぬ 典「矢張り槍術  
でございませぬか 小「神影流は劍道でございませぬ 典「ハア左様か  
然らばと云ふので最初門人が一二名出ましたか何れもモ一年  
半年の稽古よりしない初心もの天下の名人にかゝつては何うす  
る事も出来なない見る 間「ボカ 〱 やられてしまつたソコデ近



塚 原 ト 傳

江典膳支度をして槍を捨て前へ出たしばらく位、取りをした  
が勿論勝負にならん然し其儘で中止する譯にもゆがん少し此奴高  
慢らしい奴だから一度は戒めてやらうと必中に考がへたから  
原小太郎が稍しばらくくろしめてニイヤツと云ふ聲もるどもに  
典膳の携たて居た槍のて手元をボカリと打とビリとシビレ  
てバツクリ槍を落して参つた 小如何でござる 典怒つた 小  
先生失禮をいたしましたと其儘別れを告げて小太郎はドン  
出て行つてしまふ跡に門人が先生氣をたしかに持ちなさいさあ  
水を一は杯召上れ 典あゝ腕がいたい ○余程いたうござります  
か 典ひどく槍をうたれたのでいたい一生懸命に握つて居る處  
をうたれたから手の皮をむいてしまつた然しこゝろやつてなめて  
置けばもう直るだらう獸物が怪我をしたやうに手の平をなめて  
居る處に玄關で頼む ○先生また來ました 典これは堪らん俺

塚 原 ト 傳

はもう今度ふたれるやうな事があれば一命はとでも助からん  
に御前達に面目ない逃げ出すかも知れん ○まあ先生御侍な  
いと門弟が玄關へ飛出して ○エ、一誰方でござります ○典  
膳が居るならば鳥渡出ると申せ ○はつと門人奥の間へころげ  
込んで ○先生大變で典膳が居るなら之へ出ると申します 先  
これ 俺の前で典膳とは何んだ失敬千万 ○先刻の修業者が  
頭を下げて來てもあんなに強ふございませ今度は典膳に出ると  
云ふ位ひだからせんなに強ひか分りませんと云ひながら又門人  
が出てくると草鞋のまゝで上つて來る ○若し 〱 わらじのま  
ゝで上つてくればちやあ困ります ○然らば早く典膳に参れと申  
せ近江典膳がドンナ奴が來たかと思ひまして押つ取り刀で玄關  
まで來つて見るとビツクリして太刀を玄關の真中へなけ出して  
敷臺へ飛下りて 典コレだれかある水を持って來い ○彌々先生



塚原ト傳

がひづかしい多分切られたので末期の水だらう……へエー先生  
 水を典コレ茶椀に汲んで来てはいかん大先生のね足を洗  
 ふのだ盥へ水を汲んでこい……足を洗つた彼の侍らひが座敷へ  
 通つたは何ものであるかど云ふと之が龜井新十郎でございませ  
 新儲て典勝久しよりしや何うだ大層さわがしいやうだが何が  
 来たか典實は只今貴下のね立寄になりますまへに東國の侍ら  
 ひで仁科興四郎と云ふ若年ものが参りまして門人兩三名と立公  
 ひ彼が爲にみぐるしき負を取りましたから拙者が立出で相手を  
 仕まつりますと只一本の元に私くしも負けましてございます  
 新ア待て仁科興四郎と云ふのは何才ぐらゐだ典左うですオ  
 未だ廿才以下でございませう新色の白ひ目のはりのよい小兵  
 な男ではないか典左様でございます新夫れじやア汝ど  
 もの五人十人かゝつてもトナモ叶はん典然し高名帳を見ま

塚原ト傳

ても仁科興四郎と云ふものは見へませせん新夫は見へまい本  
 があるだらう恐らくは塚原小太郎であらうと思ふ典何れの塚  
 原でございます新常陸の塚原土佐の俸れで上泉門人であらう  
 と思ふのだはずかしながら此方が先日上州赤城の奉納試合に負  
 とつた其節に龜井の名を出すも如何ぞ心得たから近江典勝と  
 云ふ其方の名を名乗つて負けた典先生冗談じやアございませ  
 ん勝て下されば有難ひが近江典勝で負けては迷惑至極で……  
 新夫で尋ねて参つたのだらう就てはモ一余程参つたか典まだ  
 たんとは参りますまい貴下と行進ひでございませ左様サ二三町  
 しかまだ参りませせん新左様かと云ふと龜井新十郎草鞋をはく  
 まも時間が惜しいからかたへにありました草履をはいて駆け出  
 した何うなる事かと典勝は表へ出て見送つて居ます其間龜井新  
 十郎はドン道之急ひで應て七八町ばかりくると姿が見へた



塚原ト傳

から 新をしい仁科氏待つしやい仁科氏と聲をかける此時に先  
へ進んで参りました小太郎勝義が仁科くと呼ぶものがあるよ  
りかへつて見ますと云ふと先達て對面をした近江典膳此處へ  
かけ参りまして 新いや仁科氏でござるか其後は御無沙汰を仕  
りました先達て御面會をいたした近江典膳でござる 少はいと  
云つて新十郎の顔を不審さうに小太郎はながめて居ます 小只  
今近江典膳どの御道場へ参つたか 新いや其儀に就て申上る  
事がござるから鳥渡道場まで御出を願ひたいと云はれていやと  
も云へず同道して立歸いつて参りました早速奥座敷へ通ると龜  
井新十郎が 新扱て仁科氏先達ては御不禮を致された實は近江  
典膳と云ふは之れにひかへて居りますが眞の典膳で拙者は何を  
かくさん龜井新十郎でございます赤城山奉納試合の砌は仔細あ  
つて偽名をいたしまして恐入る就ては御身も仁科良四郎どのと

塚原ト傳

云ふは御本姓ではござるまい願くば何うか御本姓をね名乗り下  
されたい若し間違つたらば御説を申上げるが拙者は御身は小太  
郎どのと心得ますが如何でござると星をさへれて 小之れは恐  
縮の至り御見込みの通り塚原でございます實はアノ試合はお聞  
及びでもございませうが拙者の兄弟子なる九目藏人が失敗を取  
り神影流と事ふ流名に疵のつく處から立台をいたしましたので  
若し某がしがむまく勝を取ればよし勝負は時の運とやらで敗を  
取りました節は彌々流名の恥辱と存じ仁科與四郎と名乗りまし  
た至たくは御推察の通り小太郎勝義でございます以後何卒御別  
懇にと云ふのですつかりと容子が分り、に於て盃を上げて武  
齒の話しにうつりましたか後に塚原小太郎が太閤へ御目見へを  
いたしましたる時佐竹公へ歸参を断はつて浪人で一生をねくり  
たいと云つたのは此の龜井新十郎と武藏子と任官をして三万石



塚原ト傳

に諸侯になつて居ますから殿下が小太郎に一万石やらうと云つたのを断はつてしまひ主家へも歸參をしなかつた之は自分に劣れる龜井が三万石以上の祿を望むと小太郎は祿に心をよするとか或ひは慾張つて居るとか云ふ評判をされるも恥辱と云つて三万石以上でなければ龜井へ對しても奉公が出来ないと思ふから断はつたのでございませぬ此の事は門人の中で自分がつ傳流と云ふ劍法を編み出した時にコト云ふ話をしていたした左うでございませぬ

傳て小太郎は當所を出立をして之より段々京都より大坂へ参り海を越へて四國へ行き金比羅嶽へ參詣して又中國へ来て藍州の宮島へ参り之へ參詣をすまして再び京都まで引返して参りましてございませぬ思ひ廻せば最早二ヶ年九州へは参りませぬが四國中國の間たを一通廻りまはつて有名な武藝者の門を叩き試

塚原ト傳

合をいたしましたたが國元の容子は如何になりつるか陣匠にも對面を願ひたいものなりといろく考がへましたから先達て中仙道に上京をしたから今度ば東海道を下らんと大津へ出て草津の驛石部を過ぎて水口も後ろになし段々東をさして歸つて参りました然るに伊豆の相模の國堺國根へかゝつてくる登りが三里二十八町東へ下つて四里八町西根八里と申しませぬが之は家康公が江戸城をひらいてからの咄し後にコトハ關所となつて函根を關所と云ふ荒井を番所と云ふ東海道に二ヶ所出陣したのでございませぬ以前は北條家が小田原を預かりまして此の山の中へ關所を出來往來の人を夫々あらためましたので然し町人なをあらためたものではございませぬ武家或ひは町人たりとも少しく武士に似よつたものは關者ではあるまいか敵のまはしものではなからうかと云ふのをしらべたのでございませぬ今小太郎勝義は彼の



塚原ト傳

關所の前を通行なさんとすると一人の番兵が進みいでまして  
○之へ御山になる御武家姓名を名乗らつしやい何れの人である  
か 小コレハ 營所は北條の、關所でございませすか拙者は  
常陸の國茨城の郡佐竹家の老臣塚原城の城代を勤める塚原土佐  
の次男小太郎勝義と申するものでございませす ○何に塚原土佐  
の子息小太郎と云はれるか 小左様でございませす ○しばらく  
お控へなさいませしと彼の番士が内へ入ると暫らくの間に何とな  
く物さはがしくなつた何に事であらうかしらと關門へ佇立する  
るとバラバラと出て来た七八人の番士が何の聲にか小太郎のま  
はりをグルグルと取廻すと一人の物置の人物手に采配を押さ  
つたが ○反逆人の塚原小太郎尋常に御繩を頂戴に及べ夫れ召  
捕れと云ふさはぎハツと心得てめん棒を以て正面から打込んで  
怒りましたが故小太郎はうしろへ飛下りアイヤしばらく各々に

塚原ト傳

待下さい拙者を反逆人とは何事とござる昨年来國元を立出まし  
て武藝修業の爲中國四國の間だをまはつて今本國へ立歸る道で  
ございませす身に犯したる罪は…… ○イヤ云ふナ汝が父土佐は  
主家佐竹家を折領なさんの大反諫此度露見に及んだる然るに汝  
は辨舌を以て此の場を脱れんとす不届もの佐竹家より營所へ  
御依頼に相成り汝をさつ事昨年以來サア速やかに御繩を頂戴に  
及べと進つた小太郎身に犯した罪があれはたとへ何十人來ると  
も高の知れたる關所役人切り捨て逃るは雑作もないが身に覺へ  
のない事然るに今怒りに乗じて掛り役人を切て捨れば此の罪は  
脱れないコ、ハ殘念ながら恥を忍んで繩を受けて重役の前へ至  
つて其次第をのべ父が無實も拙者の冤罪もすゝがんと早くも老  
がへましたから 小イヤ暫らく御役人御待あれ拙者は悪事をし  
た覺へはないが各々力が悪人と御見做なされたならば致し方も



塚原ト傳

ござらん決して御手向ひは仕まつらぬ御繩を頂戴いたしませう  
 依つて何うぞ重役人の御調への席へ御引渡し下さいと大小をなけ  
 出して後ろへ手を廻はした役人の方でも實に意外な思ひ今塚原  
 小太郎と云へば麒麟と云はれたる武藝の先生若し引抜ひた節に  
 はドンナ事になり行かと思つたが實に思ひの外有様ソコデうば  
 へ立寄まして繩をかけて之を役所へ引され調べなされると思ふ  
 としらべない其儘に致してトウく之を小田原の城中の牢につ  
 ないでしまつた日に三度の食事は二度となつて只命をつないで  
 居るばかりだ何う云ふ譯で父の土佐が反逆人になつたかと思ひ  
 ましたけれども尋ねる事も出来ない如何なる豪傑勇士と雖も  
 牢に入れられては堪らんのに況んや此の小太郎を入れたのは石  
 で作りました石牢と云ふので小便をする度母にも必ず役人の手  
 がかゝると云ふ實に情けない身の上になつた恰度或る夜の事

塚原ト傳

ございましてが小太郎は牢中でウツとしてゐると小太郎く  
 云ふ聲ハツと目を覺して見ると朦朧たる間だに父土佐が朱に  
 まつて現はれまして涙をハラくとながして小太郎の顔をデッ  
 と見る小太郎身体に汗を流してゾツとしたハツと気がつくど南  
 柯の一夢小夢は五臓の勞れとは云へ不思議な夢もあるもの之は  
 と思ひつゝまどろむと又再び父の土佐が姿を現はした不思議  
 だと思ふ内に東が白らみわたつて聽て鶏鳴を告げる頃をひ  
 コレ粥をどらせるぞ小有難ふございます就ては少々ね申  
 しますが ○「なんだ小私くしが牢内につながれてゐる譯が分  
 りませぬ御召捕に相成つて今日ではハヤ七日何のおしらせも  
 さいませぬが何う云ふ次第で召捕れましたるものか御存じなら  
 ばおさかせを願ひます ○「ハア一企たくお前は自分の身に犯し  
 た罪はないのか 小左様でございます ○「私は身分が輕ひから



塚原ト傳

くはしい事は知らぬがお前の親の土佐と云ふ人は佐竹家押領の  
 罪で此間を殺されたと云ふ事ソコ塚原城はれ前の祖父が預か  
 つて居た左うだが夫は取上げになつて兄の帯刀と云ふ人も死ん  
 だと云ふ噂さだソコ弟の小太郎と云ふ奴が大層強ひから之を  
 召捕つて呉れると皆な御交際の御大名へ御頼みになつたと云ふ  
 わけだとか話しをきいたが兎に角れ前の親と云ふのは死んだの  
 だらうハツと気がついた小太郎は夕邊の夢は正夢であつたる  
 か父の靈魂此世にいであるものか元身父が悪事をなさるれ人  
 ない讒者の舌頭にかゝつて御最期をなされたかアラ無念と云ふ  
 と小太郎がウンと云なりだした ○オイ、左うなつた處  
 が仕方がない 小ア一残念至極定めし佐竹家の執權職たる佐竹  
 彈正とは平常父と意見合す彈正が御家押領なさんとするを父が  
 ためにいましめられし故彼が奸計を以て非業な最期なされしハ

塚原ト傳

此の世の中にわしほど不幸なものはあるまい數年の間だ武藝  
 業の爲に諸國を往來し久々にて父に面會なさんとする事も出  
 すかゝる凶報をきくとは何事なれ悪人其儘に置くべきかとウ  
 ン ○左ううなつた處が仕方がないから食事もしたらよか  
 らう 小ハイモ一めしも欲くはござらんウンとウナのテ居る  
 ○よく氣をつけて跡でたべるがいと番士は其處を立法りまし  
 たが小太郎は中々怒りはとまらず儲て如何なれば土佐が横  
 死をなしたるか此の一件は次席に申しあげるといたしまして一  
 寸休息をいたしませう

第七席

儲て此の騒動と云ふものは如何なる理由かと申しますると其頃  
 をい常陸の國茨木郡水戸に於て八十万石佐竹右京太夫がおかく



塚原ト傳

れになりまして若殿が今度左中將に任せられ義直と御名乗りな  
された未だ御年は漸や十三才でございませぬ徳川家の頭をひ十  
五才でないも御家督が出來ませぬ爲成ひは後見と云ひ番代と云  
ひ夫々補助をするものがございませぬが其以前は公儀はあり  
ましても後見がなければ十五才以下では家督させないと云ふ程  
の嚴重なる規則がないのでございませぬが十三才で左中將に任せ  
られて義直公が御家督をなさると當時其家の執權で同姓彈正左  
衛門と云ふのがありまして之は當家母方の伯父ですよく此の外  
戚に感ありと云ふのは清盛はじめ世の中にはいくらもあるもの  
で先づ佐竹八十万石の政治は此の彈正左衛門の掌中にあると云  
ふ位は次席につらなつて居るのは梅津内記と云ひ之は古老の人  
でハヤ六十以上に相成りませぬが誠とに廉直な人で只正直を旨  
として何事にも口だしをしない彈正左衛門の勢はひにマツ

塚原ト傳

がつゐてる形ちである處が第三席にまはつて塚原の城代をして  
居る塚原土佐と云ふのは當時三万石此の人が大の忠臣で中々  
かない人で此の三人がならんで政事を取てゐると梅津の方は彈  
正左衛門の云ふ事は只命之れ従がふと云ふ形ちで主君同様に此  
の人を尊敬してゐる塚原土佐は何事か私くしがあるも士夫は  
執權少しく我意が慕るでございませぬに夫は執權よろしくござ  
いますまいと一々之に抗拒をする積にさはつて仕力がない何う  
かいたして此者をなきものにしてしまはなければならん折があ  
らうと隙を窺がつてゐる誠とに御氣の毒なのは塚原土佐でござ  
います處が悪人の時節到來とも云ふべきか梅津が此の中から病  
氣大層悪くございます折々見舞にいつて容子をうかいつてゐ  
る處が死ぬ程じやアないが何分にも六十以上の老人若ひ人より  
も勢れかたが多ひ此の病中を幸はひ塚原土佐をないものにしや



塚原ト傳

うと今日は一通の書面を携さへて彼が病床に見舞にくる梅津内記は重き枕を上げて内之は執權れり、れ尋ね下されて誠とに恐縮いたします。彈イヤ、老体決して御心配なされるナ拙者の家は親もより今日に至るまで御高恩を蒙り今では見られる通り御家の政治を預かる身の上となりましたも偏へに御老人の御引たて父がなくなりましてより御自列を親ども兄ども思へばころお慕ひ申すわけ然るに此の度大事件出来いたしました挨拶の間に突然と大事件と云はれたから梅津内記は思はず枕を力に起上り内何事と云ざる。彈怪からん次第ア、情けない御自分病氣でなくばと實に途中ながらも心配を致して参つたわけ内病氣なりとも梅津内記國家の爲我が一命は鴻毛よりかるとい如何なる事かイザ承たまはらんと雨眼になみだをうかべた心中にしめたりと思つた彈正左衛門實は御老体他聞をばいかる太

塚原ト傳

事れ側の衆を……ソコデ看病して居る二三名の家來を遣さげ例に依て御障子をひらかしめあたり立聞の者がないやうにして於て彈偕て我々が同席に列なる塚原土佐が反逆を企だてました梅津内記は意外の言葉にしばし彈正の顔を見て居ました。梅何事と心得れば土佐が反逆とや失禮ながら恐らくは聞違ひではございませんか。彈イヤ夫は拙者も一應の事では口外を致しませぬが兼て御自分も御存じの通り越后春日山の城主上杉輝虎が家來にして當時勢はひの強ひ平賀左馬頭と塚原とは親族のみならず無二の間柄處が然に今回上杉勢はひに乗じて關東を切拵らんとするについて奥羽兩國の地を押へんには常陸下野の間だを我が領地にいたさんければ相成らんといふので當城を亡ぼし夫れより常陸一圓を拜領なさんといふので土佐へ段々との願み始めの間だは主家へ弓を引事ならんといふので承知いたさず



塚原ト傳

居りました今度右平賀の娘と自分の長男帯刀と婚姻取り締り  
との間柄所謂切つても切れぬ縁合となりせしたる就ては何うも  
親子の情と云ふものは妙なるもので日頃忠義無二たる土佐が彌々  
反逆を企たて、正面の往復ますはげしき事は度々承たまは  
りましたか證據を得ませんが爲今日まで捨置きたる中に計ら  
ずも今度手に入りました此の書面御老体心静めて御覽下さ  
いと差出した梅津内記取り上げて段々讀むと成程土佐の書面に違  
ひない之迄同席として彼の書風と云ふものも心得て居る中  
普通の書面とやアない其文面の概略は近々の内に兵を擧て當城  
へ押し寄せる常主御幼年と云ひ茲に取争が始まる時には必らず  
家中のものはチリ／＼バラ／＼其際常城を乗取つて常陸一國を  
上杉家のものになさんといろ／＼認ためてある涙をながしたる  
梅津内記が天なるかな命なるかな深く企みし彼等が陰謀も茲に

塚原ト傳

露見いたしたるは神明佛陀の御罰でござらう病ひでなくば梅津  
内記唯一人塚原城へ参り彼の土佐を討取るべきでござるが病ひ  
には勝れん鬼に角土佐を城中へ呼びよせて彼を召捕り以後を戒  
しめて改心致せば……彈イヤ内記の夫は不叶せせん之が愚  
かなものでは慾心の迷ひでありましたらば或ひは意見を加へて  
改心なすやも知れませんが彼の土佐は和漢の書に眼をさらし殊  
に軍略に秀でたる人間惣領帯刀は頗ぶる大學者只今は當城には  
居ませんが二男の小太郎は上泉伊勢の守の四天王にて近世武道  
の麒麟と云はれる位の中々夫だけの俸二人をも持ち何事も辨ま  
へながら反逆を企たてる土佐が我々の意見や説得ぐらゐで改心  
をするものでござらん依て之はうれがしに任せを願ひたい實  
御病中の御自分御相談いたすも御氣の毒には候へども拙者一存  
の計らひを以ていたしては后日世上の申しわけもござらん依て



塚原ト傳

御相談に罷り越したるが如何でござる御任せ下されヨと辨舌を温  
 ましくして老人を説つけた元來暗愚にして思慮のない人ですか  
 ら彈正左衛門の一言を信じて何分老躰のそれがし殊に病中でご  
 ざれば万事御身にねまかせ申す間如何やうともなじ下されたい  
 千万御苦勞に存ずると彈正左衛門へ頼みましたシテやつたりと  
 悦こんで病人に暇をわけて立歸る折ころあれと待かまへてゐ  
 る中に御用について水戸城へ出頭せよと云ふ沙汰があつたから  
 彼の塚原土佐は領分塚原を出まして御城下まぢかまで進みます  
 間だ別段にかはつた事もございませぬ松原近くへくると馬上に  
 ありました塚原がアツと云ふ聲と共に馬上より落るとボンと云  
 ふ砲聲だ驚ろひた家來の秋山番作秀虎ハツとあたりを見ると又  
 もや砲聲一發脇腹へあたつて土佐はウーンと云つたぎり此時に  
 番作は主人の死骸を抱へながら番曲ものあり各々油斷をする

塚原ト傳

など云ふ下知に供の人々大ひに驚ろき曲者ありくと聲をかけ  
 てくすれるもあり槍持の携さへたる槍を取て鞘をばらうもあり  
 大騒動此の時松原の内に居あつて「イヤ」反逆人塚原土佐  
 の家來神妙にお細を頂戴いたせ手向ふ時に於ては一々召捕て究  
 命に及ぶから左様心得る秋山番作之をきいて番ナニ主君をど  
 らへて反逆人とは何事なり左う云ふ汝は何者なるか姓名を名乗  
 れ我こそは塚原土佐の家來秋山番作と云ふものなり之へ向ひし  
 は何ものなるか「はいしくも姓名を名乗りたり我ころは佐竹家  
 の忠臣彈正左衛門の家來近藤角兵衛と云ふものである主人の命  
 を蒙むつて悪人土佐を討取つたり主人かく絶命の上からは汝等  
 に罪はなし尋常にね細を頂戴なせば格別御憐愍もあらう心得  
 進ひを致すナ之をきくと怒りを發したる秋山番作「番だされ儲  
 は彈正汝がたくみエ悪事をば我が主君を打て其罪をせんとす



塚原ト傳

段憎き振舞イザ土佐の家來が腕前を見ヨ各々主君のかたき逃す  
など下知に及んだり流石に番作もコ一は云ふもの、主君の横死  
に氣もゆるみ泣く、首を打落して之を羽折につゝみ小脇に抱  
込み一同たゝかふのを跡にいたして塚原の城中をさして一生懸  
命にかけたした城中には帯刀が父が出立いたされ升る跡は机に  
向つて書見をいたしをる處へ一人の近習驅來つて、御前只今  
番作が立歸りね目通りを願ひ居ます、帯儲は番作立歸つたかと  
云ふ問合もあらせす朱にうまつて何か包みやらなものを小脇に  
抱込み机の元へ來つて、帯番作尾籠なり如何いたしたる、番御尊  
ツツと泣き出した、帯番作尾籠なり如何いたしたる、番御尊  
父様に御目通りあそばされヨと羽折に包みし彼の首級を前へ出  
したビツクリして帯刀が、帯、父上如何なされし、番首級  
に相成られた、一と通り御物語り仕まつ、ん實はコレ、コ一

塚原ト傳

云ふ譯と松原の事件を話し之を彈正左衛門の計略でございます  
貴て御なきがらと心得ましたが大勢にとり巻れたもので難儀  
の都合残念ながら首級だけ打取りて立去りましてございます此  
の上から當城に引籠り討手を待て花々しくたゝかひ悪人彈正を  
打取り御主君の罪なき事を訴たへ出るより他はございませんと  
云ふを聞て帯刀はしばらくの間だ彼の首を御覽なされて、帯生  
刻は御機嫌よろしや當城をお出立なされたが應て左様な御姿た  
になられたか實に人生程はかないものはござんな父上帯刀で  
さると女やしいやうでございます、親子の情は格別しばらくの  
間だ泣てゐる處へ天地もどいろくばかりツツと云ふ岡の聲之な  
ん佐竹彈正左衛門の討手と覺へたり真先の方へ馬印しをたて、  
悪人土佐の家來ども尋常に門をひらいて降参せよれ繩を頂戴に  
及べと呼はつたり番作はるかに之をさいて、番憎つくき處の惡



塚原ト傳

人ども塚原土佐の家來番作の側らき目にも見せてくれんずと  
 立上るを帯刀 帶まで番作大戻のくつがへらんとする時一木以  
 てさはへがたし寡は以て衆に敵すべがらす古言もあり彼等は  
 勢味方は小勢父上御生害したから味方の面々力も落ちなん我  
 れは此場を枕に相果てん汝は大儀ながら此の城を脱れて父が首  
 級を何れへなりとも葬むりくれヨ猶今は行術も知らざれども弟  
 小太郎に面會なし今度の恨みをばらしくれヨと云はれて番作  
 番コハ情けなき仰せ番作は御主君の御供をしなければ相成りま  
 せぬ當城へ一と度立歸りましたは御主君御最期のやうな御話し  
 申し度為最早注進相濟みました上からは城を枕に討死の心底然  
 るに今又當城を立情けとは甚はだ情けなき事に候何卒此義は他  
 のものに…… 帶イヤ〜 然うでない逃ると云へば卑怯と思ふ  
 であらふ逃るに非ず立退くのである今申する通り此方が虚願の

塚原ト傳

身躰生ながらへ居つても父の無念をばらさには相成らん依て當  
 城にて相果れば其方は二男小太郎に面會なし父の恨みをばらし  
 くれるやう宜しく申しつたへてくれヨ死は一旦にして安し生は  
 難しとやら此の儀は汝ならん死するも忠義生の忠  
 義彼の杵臼程嬰は何れを忠義とも定めがたいコレを能く思案を  
 なして速やかに當城を立退け…… アレ聞の聲はます〜 さかん  
 にして最早大手はやふれたと相見へる如何に番作とく立退すや  
 と平常にない帯刀の怒りのまなこに涙だをハラツタル番作 番  
 仰せかしてみ奉まつる如何なる處にましますかは知らされども  
 小太郎様に死り會ひ必らず御説を申しつたへん左れば御死と立  
 上らんとするのを 帶コレ〜 番作汝小太郎に廻り合し節兄帯  
 刀が遺品じやと申して之を渡してくれヨと粟田口國吉の一刀を  
 渡しました 番委細かしてまう奉まつると主君に別れて聞の聲



塚原ト傳

矢向ひを跡になし搦手の水門より致して就に番作は立退きまし  
た其間だにハヤ大手の門をうちこわして乱れ入つたる處の兵士  
は本丸間近に進み來たる忠臣のものどもは之に向ふて討死をな  
す卑怯未練のものどもは城の堀を越えて逃出すものもあり其中  
に帯刀はなまじなまなか彼等に向つて名もなきものどもに首を  
討れ或ひは繩目の恥をいたさんより一層自盡するにしかじと登  
悟を極めたがかかふる騒ぎの間だに悠々と衣類をあらためて彼等  
がおどり込ざる前に立派に切腹をいたして相果る寄手の大將佐  
竹彈正左衛門は就に勝鬨をあげて首級其他のものを携さへて立  
歸りましたソコで塚原城は落城の後更に之へ城代を置く云ふ  
評定  
ね話しかわつて番作は姿をかへて諸方をまはり就に相州小田原  
の城下捧鼻にかゝつて参りませす茶見世に休んで休息をして居り

塚原ト傳

ますと ○オイ熊何故アノ一件ものを送らないのであらう 熊  
何せ送らねへと云つても相手が大變ものだ ○何だ大變者つて  
熊中々強ひのだアノ奴郎は ○左うだつてねエ 熊何にしる三  
万石と云へば家老にもしる大名同様な身分だから軍鶏籠や網乗  
物じやア送れねへ中には又忠義な家來が居て途中で乗物をやぶ  
つて運て逃ねエともがぎらないソコデマアしばらく其儘にして  
置と云ふのだが首も切らず舌なぐを切られちやア大變だと云ふ  
ので御城内へ石半と云つて石で半をこしらへて其中へ投げ込ん  
であるのだものだからマア一月や二月には送るまいと思ふ  
○左うかソイツはつまらねエ俺は其位ぬの罪人をねくるのだか  
ら大層な金になるだらうとたのしみにして居たが送らなくちや  
アのさらねへ 熊何にせい小太郎といつて可愛らしいものだね  
ソナカはいらしい名の奴が強くて安兵衛見たやうなこわい



塚原ト傳

つらをして居る奴が弱ひのは……シャアア當分首も切られへ  
のだ 熊アノ傲石の半、投り込んで置くのヨと人足体の話しを  
さいた例の番作が小太郎といへば若旦那の名然らば當所に於て  
お召捕になつたのか一應さいて見やうと思ひまして、番コレ、  
人足今お前の話しをした人は何處のものか ○旦那様お前さん  
もお侍らひですが強ひ奴があるものです 番何處の人か當城下  
のものか ○何に左サじやアございません常陸の佐竹の家來で  
塚原土佐と云ふ家老の件で小太郎何とか云つて劍術が強くて  
力があるので親父の土佐が反逆人だ左うで西根の番所で其小太  
郎と云ふものを召捕り今では御城内の右半へ入れられて居ます  
番夫は、ア反逆人ならば召捕れるのがあたり前だナ ○右  
うですとも泥棒すれば首を切られるので 番夫はアソソナも  
のだと云ふやうなもの番作は直ぐにも乗込んで小太郎を助け登

塚原ト傳

したいと思ひましたガア城内にある半の容子も知らず況んよ  
北條家の半内うかつな事をしてはならぬ何か計略がと思ひあつた  
つたは自分は元來伊豆の眞鶴のもの幼年の頃をひ國を出て現在  
の父と弟とは伊豆の眞鶴ヶ崎に居る漁夫だ之へ參つて相談をし  
て見やうと考がへましたから茶代をばらつて當所を出立をなし  
眞鶴ヶ崎へ乗込むとはからずも弟の熊吉をつれて破牢に及ぶ近  
世珍らして大方の熊吉と云ふものに久方ふりにて兄弟が面會す  
るのれ話し鳥渡一ふく

第八席

伊豆の國眞鶴の港と云ふは相當に盛んな處でございます只今で  
は石なすを切出しまして大層石職人がすまつて居る處ですが其  
頃はホンの漁師町でにぎやかだ盛んだと云つた處が高の知れた



塚原ト傳

ものでございませう故郷を出て二十年ぶり番作も生れ處へくると云ふは何んどなくうれしきもの父は如何に母は何うして居るかど心にかゝりながら歸つて來ると表には綱だの綱だのと云ふやうなものがいろ／＼はしてある心中に悦び／＼して冠つて居る綱笠を取つてスツと中へはいり向ふを見ると居るものもどにあぐらをかいて一人の親父が居る番「コレハ」相變らず御機嫌なよろしむございませうか○「ハイ誰方でございませうか年老は目が悪くつて御見それ申しますが何方でございませう番私くしでございませう番作でございませう父「イヤ一成程番作だ豊年だ……」ア大きくなつて戻つたナエライものになつた侍になつてゐる事をきいたが俺が云ふ事をきかねエから勘當と云ふ譯じやアないか永らくの間だ音信不通よく歸つてくれたコレ熊や汝が逢たいと云つた兄様が歸つて來た汝は三ツの年に別れたから兄の

塚原ト傳

顔を知るまいがコンナ大きな立派な侍らひになつてさいいた熊吉が裏口からかけて参りました大きいと云ふ番作から見ると一尺も高からうと思ふやう熊親父さん之が兄様か番如何にも其方の兄番作である熊吉大きくなつた幼年の時に別れた兄と思ひくれる段忝じけない儲て御父上……父「ソナナむづかしいお父上なんと云ふナ親父どの方分りいゝじやアないか番左様なれば親父どの様父「ナンドどの様と云ふのは番母土は如何相成りました父「またうんな妙な事を云やアがる婆様は死んだヨ番「儲は母様は御死去なされしか父「婆アの死んだ跡は熊吉を相手にくらして居るのだソコデお前は何處に居るのだ何でも常州に居るとか云ふのをきいたが番「左様でございませう佐竹家の家老塚原土佐様の御家來になつて父「左う／＼ソナナ事をきいたつけなんでも經節の取れる處だと思つた土佐……左



塚原ト傳

うゝ土佐の家來になつて夫から何うした番處が御主君れか  
 くれに此間だなりました父ウシ何處にかくれた番死んだの  
 でございませす父成程左うゝ死んだのをかくれたとか云つた  
 生れたのを現れたとか番ソシナ事は申しませせん父夫が何  
 うした番れ父上は何事も御存じございませぬが侍らひと云ふ  
 ものは忠義……父コレ馬鹿な事を云ふナ俺が一字一点駈りな  
 いがれ寺の説教もさいてゐるし此の邊には時々まはつてくる  
 辻講義で人間は親には孝主君には忠……夫も忘れてはならん位  
 の事は知つてゐる親父様は何にも知るまいとは何だ番職と  
 に恐れ入りました實はコゝかやうゝと二十年來世話に  
 なつた主君が悪人の爲に命を捨て其仇と報はんとするに就て御  
 次男の小太郎様を尋ねて居ると箱根の關門で召捕れ小田原の城  
 内石半の中へつながつてござるこの事ソコテ私くしは魚やにな

塚原ト傳

るとか人足になるとか何かに姿をかへて御城内へ入込んで其石  
 半を破つて小太郎様を助けたいと思ふにつき御相談の爲に參上  
 いたしましたか何うか父上梓れ番作が忠義をたてる道に力  
 をそへて下さるのは出来ませぬかと云ふのを腕こまぬいて  
 いて居た熊吉が熊兄様必らず御心配には及びませぬ私が何と  
 か工風をいたしませうれ前さんは身をやつして御城内へ忍び込  
 むた心でございませうけれども向ふが役人見おらはされた節に  
 はつまりませせん夫よりは嵐の夜をまつて御城へ忍び入りまし  
 て助け出しませう此の小田原の御城のうらは誠とは堀が深ふと  
 さいませすが此の里に生れて承らくの間だ海で稽古をした水練た  
 とへだどへドシナに堀が深からうが懸るく事はございません夫  
 にない私くしの力を兄様へござらん入れませんが土蔵の一ツや二  
 ツ打ち毀すのは譯はございませぬ……ひとい奴があるもの番作



塚 原 ト 傳

は熊吉の顔を見て居るとニコニコ笑つた親父が 親左うだ兄は  
まだれ前の力を知るまい見せてやれ 熊かしてまじまじした  
と云ふと忽ちまぢの間に庭へ飛下り三尺四方もあらうと云ふ大  
きな石へ手をかけて左ながら我々が策か合李をもつやうなもの  
でウント力を入れると地を離れてアレレと云ふ中に肩へ上げ  
てヤツと云ふと差し上げて向ふの方へツドンなげだして 熊兄  
さんコンナ事朝めし前でございませすモ一少々力をね見せ申しま  
せうか 番モ一よい 大變力がある夫ならば大丈夫年も破れ  
やう 熊兄さんコンナ事は暇とつてはいけません思ひたが吉日  
と云ふたどへもあり是からいかうじやアございませんか 番然  
らばれ又上何うぞ熊吉をね貸し下さい 父何に貸すもかさない  
もない勝手につれていくがいか俺は知る通り昔しから多くの網  
を持って人傑へかしてあるしそれが縁がないでも二年や三年活計

塚 原 ト 傳

に困る事はない熊吉が居なくつても大丈夫だ私が忠義をたてる  
に 入用ならばつれていけ 番有難ふございませすモ、デ兄弟支  
度をいたしまして伊豆の國真鶴の港をたつて再び相模の國に  
歸つて小田原城の近邊を徘徊して容子を見て居ますと第三日  
の事で天の助けか今日は日のくれ合から降出した雨……雨ばかり  
りでない風が強くつて所謂嵐と云つたコレ幸はひと云ふので兼  
て力を知りたる熊吉をつれて搦手に廻はりまして見ると如何に  
も堀が深ひ風の爲雨の爲にいくらか堀の水は増してゐる容子石  
垣に取りついて下へねりて扱手をきつて向ふへ渡つた熊吉再た  
ひ築垣へ登り容子を見届けて置て取て返す 熊少ア兄様大丈夫  
だお前さんは此の堀を越せるか 番面目ないが水練は心得ぬ  
熊夫じやア背負て越して上げやうと用意の繩を取りだして兄の  
番作をねぶつて熊吉が再び堀へ這入つて漸やくの事で向ふへ



塚原ト傳

わたり樂垣を越へて城の内へ忍び込んだドツと云ふ風何處に  
 があるかと思ひあたりを見ると遙か向ふにありが見へるから  
 夫を見當にくると番小家が出來て居て二三人の役人が車座にな  
 つて話しをしてゐる。楯は此近所であらうと又十四五間向ふの方  
 へ進んでくるとギョ／＼と光るのは石牢でございませす只今では  
 石で家を造るのはいくらもございませすが石で牢を作つたのは珍  
 らしい澤山に石がつみかさねてある右へ曲ると格子戸がある中  
 を覗いて見るとぼんやり人影がある牢格子へ手をかけた番作  
 番若様小太郎様とよぶたゞ忙然と座をしめて居た例の小太郎勝  
 義 小我が名をよぶは誰じや何ものである 番若様番作でござ  
 る 小たれじや 番秋山番作でござりませす 小イヤ番作か何う  
 して之へ 番イヤコ、デは御話しになりませせん後刻申し上げま  
 せう若様少々左りへ身体をたよせ下さい……熊吉は牢の格子へ

塚原ト傳

手をかけてウーンとやつたが石造で中々大丈夫な牢へはまつて  
 ゐる格子容易には破れない何か得ものはないかと思ひ横の方を  
 見ると大きな石が二ツ三ツころがしてゐる之が屈竟と右の石を  
 抱へて置いて例の格子へズシンと二ツ三ツ當テるとメリ／＼ポ  
 テリと格子が一本折れたしめたと又一ツ折て小太郎の手を取つ  
 て之へ引出したいろ／＼話しもございませすがコ、デは申しませ  
 ぬ此の刀は主君御刀様御遺品でございませすと小太郎に渡してゐ  
 る中にしばらく雨も上つた容子番兵の奴等はメリ／＼ズシンと  
 云ふ音に氣がついて ○何だらうアノ音は提灯にありをにつけ  
 ると云ふので提燈を取て二人の奴が出て來て向ふの方を見ると  
 石牢の前へ大きな奴が三人突立て居る夫れ曲者と飛込んだ彼の  
 熊吉面倒なりと云ふと横手にあつた八寸の丸み角を持って横には  
 らつた何うして堪るものでばない三人の奴は一度にメチャにな



塚原ト傳

つてしまふアツと云ふ聲をきいて番小屋から出てくると此の騒  
 動夫と云つたが半を小太郎が出た節には迂闊な事は出来な  
 ア、一際驚てゐる方がいと云ふあんばい飛出した奴も三人が右  
 へ往けば左りへ行く夫れじやア大丈夫つかまる氣違ひもござ  
 いませぬ首尾よく搦手の門をひらいて主従三人其儘にして逃延る  
 夜は白く、と明け放れて居りました雨も穩やかになれば風も思  
 ひの外にしづかになりました役人どもは皆々是から諸所をさが  
 し始めました相知れる道理はないソコで三人のものにねさまし  
 ては小田原より程近い函根の山間なる谷間に進たつて番作塚原  
 小太郎の前へ兩手を突て番若様殿に御不禮を致しましたる  
 段假へに御容赦下されたし御話し申すも涙の種には候へども實  
 は是から父土佐が兇徒の爲に松原に於て殺された一件から落城  
 兄帯刀切腹より遺言について弟をつれて此の城内へ忍び込み之

塚原ト傳

れまでつれてまゐつたる長物語り一々さく度毎に兩眼に涙を  
 かべて拳をにぎり齒をかみならした小太郎が小ウシ儲は父上  
 兄上には悪人の奸計の爲に御落命ありつるか天道は是非か父  
 はお家の忠臣と云はれ之は篤實の君子と云はれ生れいで、今日  
 まで悪事と云ふ事は塵埃も致した事のないものが悪人の爲に  
 命をすて首級と体を別れ、にして葬むるやうな情けない  
 事があるか左りながら汝あればこそ今日始めて父兄の横死を聞  
 此の後の方向も定まるに至る殊に熊吉をやら汝の恩は忘れんぞ  
 と手を取て禮を云ふを熊吉は夫を振拂ひまして熊何にも知ら  
 ぬ漁師の私くし兄が長の御恩を受けました聊さかの御恩報じに  
 もなりましたかと思ひまして致した事猶此の上ともよろしく御目  
 をかけて下さいまするやうに小其方の志るざりは悉くけない  
 が今番作から容子をさけば汝は母もなく當時親たるは父た一



塚原ト傳

人故郷にをるときは兄番作は最早武士となるものなれば侍らひ  
 の道を盡さなければならぬ氣の毒ながら其方は召つれる事は相  
 成らん其方は宅へ歸り兄が居らざれば二人前の孝行をして母な  
 き父を大切に致すがよからう聖人の言葉にも父母いたす時は遊  
 く遊ばす必ず方あり事がすめば故郷へ歸つて親を大事にせよ  
 熊へエ一儲は殿様私くしはれ供をする事が叶ひせんか 小何  
 も叶はんと云ふのではない其方如き力あるものを供の内に加へ  
 なば拙者も心強く覺へるが一ツの力には相成れども夫では世義  
 が立ち孝がたぬ家へ歸つて親に孝行なせば此の番作もうしろ  
 安く忠義も出来る汝と二人拙者につき添ふ時には却つて親へ心  
 配をかけて不孝となるコゝの道理をよくわきまへて故郷に歸り  
 くれ分つたか熊吉 熊へエよくわかりましたア一此の世の中と  
 云ふものは思ふやうにならぬものでござりまするしうござ

塚原ト傳

ます夫とや兄さん俺は孝行の方を引受るから前には忠義の方を  
 頼みますと兄弟二人が忠と孝とに分れましてかゝる正直な人は  
 物の道理も分り安いもの深きよくも熊吉は立上つて 熊夫れと  
 やア兄さん何も云ふ事はないか 番何うか親父をんへよろしく  
 申してくれ 熊夫は云ふまでもない夫では殿様御機嫌よろしく  
 と涙ながらに熊吉はコゝデ別れて立去りました  
 此方は主従二人が之ではならんと一度伊豆の國加茂郡當時の三  
 島の驛へ来てコゝデ姿をかへて四五日の日を経てふたゝび當地  
 を跡になし函根山を越して段々と常陸の國へ乗り込んで参りま  
 したのは父兄の仇彼の彈正を討取らんのが一懸て水戸の城間  
 近く恰度眞壁の松原へかゝりますと云と大きな建礼がたつて  
 ある立ち止まつて小太郎が之を見ると  
 反逆人塚原土佐が實弟同苗彌六郎此度大杉山の宮司大杉



權之頭と名乗り候もの當領主に對し逆意さしはさみ兄土佐の悪意をつぎ候事露見いたし當刑場に於て磔罪に行ふものなり

とあるを見てビツクリした此の彌六郎と云ふのは土佐の弟にして幼年の頃より學才がありまして身体が虚弱でトテモ武士として戰場を往來する事が出来ませんからソコ此の大杉權之頭と云ふ人の元へつかはして養父が亡くなりまして后權之頭と名乗りまして大杉神社の宮司をつとめてゐると今回土佐が不意の災難で彌々塚原城が落城と云ふ事をきいて流石の彌六の權の頭落膽として其日から食事も出来ぬうつくとして樂しまぬ所へ一人の武家が参りまして ○明日は當所の御家老彈正左衛門の當社へ御参詣に相成るにひるは當社で召上る事である宮司に於ては右の手當をいたしをかれるやうに此の段を申し達すると云

塚原ト傳

塚原ト傳

ひせて立歸りました取次の者から此段を物語るに權の頭はしばしの間何んにも云はず只點然として居ましたが何に思ひけんぬのお八重をよんで 權やゑ今御使ひの趣ひきをきいたか 八承たまはりましたとござます 權私には前に頼みがある 八何事でもございます 權他でもない此の大杉の家を私しにくれる事は出来なにか 八之はかはつた事を承たまはりました昔は土佐様所の所から當家へ養子にねいでありまして子供の時は私しと兄妹のやうにして頂度十六才の時に始めて婚禮の式をあげて夫婦となりましたのもうゝ養子養女と云ふものは其家の相續者にしたい爲に貰ひましたものでございます女は三界に家なしとやらでたとへ家の娘にもいたせましくしが家ではございません此の家は貴下のもの今改ためて此の家をくれヨとは少しく話しかかはつて居まするやうに思はれますが 權イヤ〜たれ此



塚原ト傳

方が相續して大杉權の頭で生涯送るならば改ためて和女に貰ふ  
 のではない養父よりもらつたのじや然るに今度は大杉の家名を  
 絶してしまふのじやから改ためてくれんと申す次第 八「エッ  
 權「サ……驚ろくは尤も家名を斷絶させ私しが身は殊によれば  
 お前の命をも捨て貰ふのである此の時に八重子が 八「善悪とも  
 に夫に従がふが女房の常左りながら其なざる事か道に叶ひませ  
 んければ及ばずながら此意見をしたします階老同穴とて共に  
 老同穴に葬むられるのが夫婦の情天竺とやらにあるバラモン  
 と云ふ宗門は夫と共に生ながら焼れるのが女の道と承たまはり  
 ましたよろしうございます承知をいたしました 權「流石は先代  
 の娘よく承知をしてくれた知る通り兄土佐どのが罪なくして悪  
 人の爲に最期を遂げ又働たる帯刀も落城の際自盡いたしたとの  
 事じや然らば此の方に力あれば悪人彈正を亡ばさんとするの

塚原ト傳

が知る通り柔弱にして討事叶はず然るに彈正明日は常時へ參詣  
 に来たるが幸はひ討つて拾んの心毒茶を用ひるとか又切り捨ん  
 の考がへ首尾よく參ればよし又仕損じたる時は我が爲に我が身  
 が死するは尤もだも云い其方の身にもかいはる事であるが故  
 前もつて相談いたし置くのじやと云はれて八重が 八「御尤と  
 もの次第委細心得ました茲に於て夫婦すつかり相談をどけて明  
 日彈正左衛門來らば之を討取らん首尾よく本望をどげんと其ば  
 んから水垢りを取つて神前へ燈明をあげ祈念をこらして相待所  
 に翌朝彈正左衛門は行列を立派にして今や常社へ來たつたり此  
 方は乗て考がへもございます俄かに毒藥を用へると云ふ事も  
 ならず參詣をする所を討取らんと直ちに裝束をつけて神前へ來  
 たつて大杉大明神の鎮座まします所に白羽の矢に弓が一挺ある  
 ハツと之へ目をつけ悪人を討取るには最上のもなりと之を取



塚原ト傳

つたるトタン彈正左衛門は乗物の中から立出んとなすを見るや  
イナ弓に矢つがへた權の頭兵フツ、と切つて放したから矢は  
を切て彈正左衛門へあはや中らんとなすときに側に居たる近藤  
左太夫が拔打に之をズバリと切拂つたり仕損じたりと二の矢を  
番へる間もあらせすエイト左太夫うつたる手裏劍權之頭の左  
の股へあたつた思はずウンと夫へ倒るを曲者召捕れと下知をし  
ますとバラ／＼と驅來つて彼を高手小手にいましめた夫れ彼等  
を引けと云ふので是から乗物の中へ投り込んで城下へくる直に  
半へふち込んで取しらべの上右の權之頭を仕置にする制札だか  
るわけと知りませんが小太郎には伯父にあたるもの捨置がた  
しと番作と共に制札のもとにたつてゐる五六人の百姓に聞き合  
せると右の話しをして此の先の原で明日行なふといふと然ば云  
ふので其夜は愛へどまつて翌日早天に例の原へ來つて見ると如

塚原ト傳

何にも二重矢來を結まわし彌六の權の頭がはりつけにならんと  
云ふ此の磔刑と云ふのは西洋でも昔しばありしましたが我が日本  
で下総の佐倉宗吾郎益煎には石川五右衛門に火あふりは八百屋  
れ七重罪の方ではい、前です  
備て權之頭をはりつけ臺にのせ檢使の役人其他警衛の者あまた  
ひかへ非人穢多どもが白柄の鎧を携さへ來つて左右にたつた今  
やつ突んとする一刺那ブント來た手裏劍彼の非人にあつたア  
ツと云ふと鎧をたづさへたなりにバツタリアレーと云ふ所に又  
一本來た二本の手裏劍の爲にバツタリ倒れる見物人は何者なり  
と思ふうしろの方大勢の見物を押分けて矢來の中へ飛込みまし  
たが小アイヤ伯父上御心安く思召せ拙者は小太郎勝義でござ  
る之に居るは秋山番作決して御心配なさるゝナと云ふより早く  
出張に及んだる役人二三名をバラリズンと切つて落した此時出張



に及んだる役人彼の近藤左大夫 ○如何に一同のものをも兼て  
の計略圖にあたり先達て小田原城を逐電なしたる小太郎勝義此  
の所へ見へたり此の機をばづさず召捕れと云ふコソコリ笑つた  
小太郎面白し其一言ソコ脱など云ひながら番作と共に切てか  
る早くも此の事彈正にきこへたと見えて眞壁の城より追々人敷  
がくり出してくる之より如何なる事に相成るか其は次席に申上  
ます.....

第九席

彈正の家才番兵が取巻て小太郎主従は計略のはなに陥入つた  
速やかに召捕れと云ふ下知の間に小太郎が礮柱を引き抜其礮  
に倒して繩目をさきり伯父の彌六郎事當時權之頭を小脇に抱込み  
國吉の一刀をひらめかして 小今日塚原一家滅亡の時來れり人

は一代名は末代たどへ小太郎の命は此處にて消ゆるとも塚原土  
佐の二男小太郎勝義と云ふ名は后世に残さんツ一同のもの覺悟  
をなせと切立る間に番作はハヤ番兵其他のものを十五六名切  
て落す此の勢はひに乘じて下知をなしたる近藤左太夫と云ふも  
のを切らんと近づくとタン一發の礮砲ズドンと云ふと忽ちちの  
間に胸板を脊へかけて討ぬかれ流石強氣の番作も二言と云は  
其處へ倒れたり之を見たる小太郎益々怒つて 小不憚や忠僕  
番作を殺したり此上からはと猶いかつてかけいだす之れが爲に  
殺される者數を知らず塚原小太郎ホツと息をついて四方りをな  
がめてゐると今小太郎の爲に逃た所の人がドウと云ふとだれ  
ついで横様にくづれる我を追來れる彼等が横にくづれたは何事  
なるかど人見をさだめて見ると遙か向ふに六七名の藥徒名  
うしろ鉢巻たすき股立をたからかに取掲げ大劍を携さへながら



塚原ト傳

無二無三に切りまくる其中に一人聲を發して ○イヤ塚原氏  
 ござるか心静かに持玉へ朋友の交誼に依て我々御助勢を申す且  
 今夫へ参るでござると近よるまゝに見ると神宮寺伊豆跡に續  
 て九目藏人磯端伴藏柳生又左衛門正田文五郎戸塚源藏淺山傳五  
 郎何れも上泉伊勢守の門人にて其名高き人ばかり 小僧各々不  
 思議なる所にて對面いたしました今度の危難御助け下されて忝  
 じけない御禮を申し上げる 神イヤ塚原氏實は我々は今度師に  
 暇をいたいて何れへが遊歩に出かけやうと申して居る處へ出  
 入町人が来たつてコレ〜かやう〜と云ふ事であつてソコニ  
 師に申せば却て如何と存じ一兩日の御暇をいたいたいと僞は  
 つて之へ罷り越したものでござる幸はひにして彌六どのも足下  
 も御無事の姿を拜見して恐悦でござる兩手をつかへた小太郎  
 小御親明の段々誠とに忝じけない之に罷り在が伯父の彌六で

塚原ト傳

さると紹介をした今なわめをどかれたとは云へ永く半中にくる  
 しんで居た權の頭の彌六は五体どもに勞れヒヨイロ〜として  
 夫へ参り 彌何んども御禮の申し上げやうもございませぬと體  
 を述べると小太郎が 小僧て各々一度彌正の家來どもを遣散ら  
 したりとはいへ彼は悪人にもせよ當國の政治を司さるもの左  
 れば再たび人数を催ふして参るは必定若し此の内一人たりとも  
 細目にかゝる事があつては理を以て非に落なければなりません  
 依て當所は此儘引上げるがよろしからう ○御尤ももの次第然ら  
 ばと云ふので一同是から當所の河原へ参りまして後舟のあるの  
 を幸はひ之に乗つて川を下る三四里ばかり川下に來たつて一同  
 上陸をすると 伊マツしばらくの間だ拙者が住居に御越しなさ  
 れた夕よるしからうソコテ他の者一向は上州みのわへ立歸る茲  
 に一人神宮寺伊豆は自分の當時の住居武州八王字在神宮寺村と



傳 卜 原 塚

云ふ當時の住居とは云へ之は先祖代々當所に居りました  
中々の家柄番とさいます之は神宮寺伊豆と云ふ講談を御話し  
す節に委しく申し上げませう、は概略といたして此の人は  
ふる信義の深き方でかねて兩名を氣の毒に思ひ大層手厚く世  
をいたしてくれせした或日小太郎が伯父の彌六に向ひまして  
小僧で伯父上實に親族も及ばぬと云ふ神宮寺の、扱かひ御  
分も拙考もかくいたして居は心ぐるしきわけ如何でござらうか  
是から越後に参つて當時上杉の家來我が身とは親族の間柄で  
ざる平賀志庵どのと元へ参り此の事の次第を述べて厄介になら  
ではござらんか 權成程夫は至極であらう然らば當所を立去る  
やうに致さうソコテ早速出立をしやうと支度になんで居ます  
と彼の伊豆が参りまして 伊何うも伯父の彌六のほは未だ心持  
もよくないやうす依て小太郎どのばかり越後へ参られたがよ

傳 卜 原 塚

らう伯父の彌六どのは今少し身体の回復をするまでの間當所  
残られた方が却つてよろしからんと思ふが如何でござらう殊に  
病人を前道をすると途中人目にたつてよくあるまい 小然らば  
せに從がひ拙者一人越後へ参つて伯父の病氣全快の頃再たび  
使ひまよとして迎へるでござらう然らばと云ふので茲に約束を  
して伯父を殘して小太郎は出立に及ぶ頂度塚原が出立に及だ其  
四五日もたちました事で玄關に立派なる侍ひが ○たのむと衆  
内を乞ふので取次が出て見れば野袴を携さへて玄關敷臺の前へ突立  
跡の面へは取なわ半拵六尺拵を携さへて玄關敷臺の前へ突立  
て居る取次の者はハツと驚ろきまして役人どもが何用で来たか  
と怪しみながら ○何れから御出てございます ○イヤ汝は當  
家の家來か...と恐ろしひ失禮な奴だ ○如何にも神宮寺の家來  
でございます ○伊豆は居るか ○主人は在宅でございます



傳 塚 原

○然ば鳥渡之へ出ると申せ驚るひた家來は早々奥へ飛込んで参り立したが ○先生申上げます ○何だ ○何だか役人らしいもの十名ばかり見へまして私くしが取次に出ると貴様は常家の家來かと申しまして伊豆に之へ出ると云つて居ります 伊ハア左様かと云ふと元來御道者で彌落だから平常着の儘小刀を前はんに帶し玄關へ出る 伊之は 何れからお出になつた ○足下が神宮寺伊豆と云ふか 伊如何にも神宮寺伊豆でござるに云ふ貴様は何人でござる ○此方は武州高井戸の代官藤井玄齋の手附村上大藏と云ふものでござる 伊代官の手附村上大藏が何御用あつて見へられたか 大だまれ大藏とは何だかく云ふ拙者は代官の手附だぞ大藏とは不識至極 伊ハハア……代官手附の村上大藏と云はれるから大藏と申した伊豆と云ふものは五分の交と云ふから此の方も大藏と云ふ人間と云ふものは五分の交

傳 塚 原

拙者は武藝を教へるものであるから先生とい伊豆のどか町に云へば拙者も御代官の御役人とも且は大藏様とも云ふ汝が頭を下ければ當方にも頭を下げて挨拶をする夫も拙者に犯した罪があれば大藏様とも云ふが元來身に犯した罪のない拙者代官たりとも驚ろかん況んや下役の汝に何で頭を下る汝のやうな奴らん奴に脅かされてヒヨロ 大だまれ罪なきと云ふなれば此方より申論ではない立ち歸れ 大だまれ罪なきと云ふなれば此方より申さける事がある汝は佐竹家の悪人塚原小太郎なるものをかくまひをるよし訴人あつて承知をしたサア速やかに當人に繩うつて出すか左なき時には汝もからめとつて罪に行なふから左様心得ろ 伊塚原小太郎は當家には居らん 大當家に居る事たしかに承知して罷り越したで汝は同門の小太郎を知らんと云ふ事があるか 伊イヤ其方が申さすとも拙者が爲には同門の兄弟弟子若



塚原ト傳

年ながら武道にかけては拙者の兄とも稱すべきものである依て  
 當所に参らんとは云はんがかくまつた覺へはさらにない又塚原  
 小太郎は佐竹家の家老塚原土佐の二男にして幼年の頃より師匠  
 上泉伊勢守の元へ來たつて劍道を修業をしたもの性質正直にし  
 て悪事なすすべきものでないかくまつた覺へはないたとへ役人  
 と云へどもうかつな事を云ふとゆるさんぞ大だまれイヤ論は  
 無益さ踏込んで召捕れ座敷の中を改ためると指圖をした夫へひ  
 かへたる代官下役のものどもが夫れしはれどひしめき渡りまし  
 た玄關の敷臺へ上らうとするときに伊豆はハツとばかり彼等を  
 白眼みつけ伊控へる不禮な奴め當家をなんと心得てゐる天津  
 兒屋根の命の未孫大職冠錦足より數代連綿と相續なしたる名家  
 であるが汝等不淨役人として不禮をなせば踏殺す先祖へ申し  
 譯けがたぬ切捨るぞと云つた ○イヤ惜しくひ奴め上役人に對

塚原ト傳

して切捨るとは何事である石井小三郎と云ふものがバツと前に  
 進んだ玄關へ飛上らんとするどひとじく彼の小劍の柄に手をか  
 けた正正から打込んで來る侍を真剛梨割に切捨たアツと云つて  
 倒れる此の有様に他のものは前に進みかねた此時に伊豆の  
 奥の間に駆込んで參りまして伊ア其方ども速やかに此の  
 道から逃る就ては常家にある品物は何なりともつかはすから持  
 つていけ何うせ最早當所には居られんのだからイヤ女中や下男  
 が悦こびました女夫は何うも有りがたふを言ひます妾しは奥  
 様の御召ものを頂戴いたします序に帯もねもらひ申します夫か  
 ら先日御縁附になりました娘様の羽折を頂戴いたします夫  
 から夜具も頂戴いたします伊何でもほしいものがあれば持て  
 いけ澤庵の押石でもよければ持ていけ女ソソナものをね貰ひ  
 申した所がしやうがない慾張つた女中が貰つた着物や夜具をし



塚 原 ト 傳

よつて裏口から飛だしたがある事が出來ないウンリウなつて居る其中に伊豆はすつかり支度をした役人どもは表口でワイ云つてゐる間に當家の門人七八名が○先生如何いたしを  
するでござる伊預りもの彌六どのにたいして怪俄あつては相成らん乗物へ乗せて裏口から逃る門異こまりましました  
是から彌六を助け出し猶奥様と子供を忍にのせてそばには門人ども各々槍を携さへ刀を抜て立退く夫れと云ふ中に伊豆は數ヶ所に火をつけた夫へ火薬をなげ込んだから叶はない忽ちの間  
にボツと燃へ上つた其間に裏口からドン／＼逃出した表の役人どもはワイ／＼騒いで夫れ火をつけた逃すなど云つて裏手へまはつてドン／＼追かける處へ旅装束の侍らひ二人追かける役人のうしろへまはると思ひしが忽ちの間に引抜ひたる一刀スバ  
リズンと切り下げた向ふへ行く伊豆をはじめ彌六等を召捕らん

塚 原 ト 傳

として踏込み勢はひのある處をうしろからワイに切られて役人ども之れはと驚ろひたる間に七八名の役人どもは夫へ切り殺されて彼の二人の旅の侍らひは乗物の跡をしたつて来て夫に居るは伊豆どのに候らはすや伊拙者は神宮寺でござる在う云ふ御身は何れのれ方○正田でござる○戸塚でござる伊イヤ之れは如何いたされた事正實は先達で御身に別れて一度箕の輪に立歸りし時先生が云はれるには伊豆と云へども小太郎彌六の兩名を預かりをるは危ふし依て其者どもをみのわへ召連れてたがよからうと云ふので拙者等二人御迎ひに参りし處が承たまはるに上役人どもが捕らへん爲に向つたどの事をきよ一大事と存じたる故鳥渡彼等をかたづけましてござる……庭の隅の處ではあるまいし鳥渡片づけられて堪るものか神宮寺伊豆は大ひに悦びまして然らばと是から七八町行つたと思ふ後ろの方から鬨の



塚 原 ト 傳

庭を上げて夫れ逃すナ召捕れと云ふ聲戸塚正田の両名ふりかへ  
つて 正信は今役人を殺した事を早くも訴たへるものがあつて  
代官の役人出張いたしたか我々兩人が追ひ散らし申さうと云ふ  
を伊豆が 伊イエ 左うでない各々方は拙者から見るとれ年  
若の人の向後の望みのある方しばらくの間之へね控へ下さい何う  
予之に於て此迷惑ながら彌六の守護して下さい此段に願ひ  
申すと云つて取て歸しました神宮寺伊豆三尺もある六刀を持て  
後の役人の中へおどり込だ先は大勢味方は一人然れども上泉伊  
勢の守の四天王で天下に雷名をした神宮寺伊豆が必死の働らき  
ワツとばかりにくすれたつ正田戸塚の二人は之を見て 正オイ  
戸塚面白さうに切っているではないか我々もいつてやつて見たい  
ナ 戸左様愉快であらうけれども茲で病人と女子供の警衛を云  
ひつたつたからは出懸る譯には参らん然しアノ有様を見ると行

塚 原 ト 傳

たくなる 正拙者も堪らなくなつた何うだエジャンケンをして  
勝つた方がいつて負た方が及るとは 戸元談を云ふナソナ事  
をしてはいかんと云つてゐる間に正田文五郎は后年正田流と云  
ふ一派の剣道をあみだした先生何うも辛抱が出来ない 文戸塚  
少し頼むと云ふとかけたした 戸何うも正田は怪しからぬ奴俺  
を一人殺して置くとは何事だと愚痴を云ひながらうしろの方を  
見ると五七人の神宮寺の門人が居る 戸各々方は神宮寺の  
家來であつて見れば相當に剣道の心得はあらう ○左様上手で  
はございませんが武士だけの心得はございます 戸然らば代官  
の木葉役人に負るやうな事はあるまいしばらく此處に守護して  
くれと云ひ捨てかけ出した處へ十四五人の役人がかけつけて來  
た之は追來たつたものとは別だと思へて横道を裏通りへ來て見  
ますと乗物があつて警衛をしてゐる奴もあまり強さうでないか



塚原ト傳

ら借は此の乗物の中には彌六であるか小太郎であるか神宮寺の  
女房子供であるか何でもかまはん召捕と云ふと躍り込んだ神宮  
寺の家来や門人は之はと驚ろひて引抜て切り合つたが多勢に無  
勢川はない役人どもは乗物の戸を引あけて彌六を引き出さんと  
するに僅かに十三才でも神宮寺の、性れ 子不禮ものと云ひ  
なぐら一刀の柄に手をかけた ○イヤ小癩なる小童邪魔するナ  
と云ひながら飛込んで高小手にいましめた神宮寺の妻も子供  
も彼の彌六の三名も忽ちまらしばりあげられる今此の儘引ゆかん  
とする處へ向ふからハイヤと馬をあをつて乗り込んでくる  
ものあり馬上ながら大刀を引き抜いて役人三四名を切て捨て二  
三名を馬の蹄にかけて蹴殺した此の勢はひに驚ろひてわつとば  
かりに散りました此の時に年若なる馬上の侍らひ ○アイヤ夫  
にわいでなさるは神宮寺の奥方又御子息ではないか猶一人は伯

塚原ト傳

父の彌六ではないかと云つた此の三名は何者かと云ふと即  
はち越後の國春加山主人上杉輝正の大弼輝虎入道不識庵謙信公  
の臣鬼と云はれたる小嶋彌太郎今一人は黒鐵上野夫に塚原小太  
郎の三名でございます早速三人のなわをといて、勲はりました時  
に伯父の彌六は一度ならず二度までも危難をたすがつたから實  
に夢のやうに思ひます一同へ向つて挨拶をして居る處へ神宮寺  
伊豆正田文五郎戸塚源藏は役人を追はらつて立歸つてくるマツ  
一同無事な對面に及ぶ此の時に小太郎が 小イヤは是より越後の  
國へ御同道いたしませう伊豆之をさいて 伊折角な御せながら  
正田戸塚の兩名が迎ひにわざ／＼參られましたから拙者どもは  
是より…… 小イヤ御尤ども千萬然らば戸塚文五郎の見たが幸  
はひ御自分は何うぞ是から上州みの輪へ御引取下さい拙者は伯  
父の彌六を連れて小島黒鐵の雨士と共に越後の國へ乗込む心得



塚 原 ト 傳

でござる 伊然らばと云ふので伊豆は乗物へ妻と傳をのせ門給  
文五郎戸塚と自分がついて上州箕の輪へ往く事になる小太郎は  
自分の馬へ伯父をのせ鬼小島黒鐵と共に越后をさして参りまじ  
た途中寺院へ一泊をして翌日當寺を出立して信州路をさして段  
々急ぎながらくると向ふからヒヨロ／＼しながら子供の前につ  
かまつてくる一人の婦人がございますコハ何ものなるかと進み  
よるまゝに一同が見ると思ひきや彌六の與方八重子の子供の  
肩にすがつて之へ見へられる乗込んだ小太郎が 少御伯母様で  
はございませんか 八オヤ小太郎のか後ろに居るのは我が夫  
でござるかど云ひつゝワツとばかりに泣き出した儘で鳥渡話  
が戻るやうですが如何なるわけでお八重がかよる場所へ来て  
の人に對面をしたと云ふと先に彌六が召捕られた時に源左衛門  
と云ふ老人と五兵衛と云ふ僕と右の八重子と子供と四人で逃

塚 原 ト 傳

した所が此の原へかゝつて参りました今から申せば昨ばんの  
日はくれかゝつて参りました泊るべき家もなし源左衛門は心  
をして 源五兵衛早く宿をとればよかつたな 五何によふござ  
ります此の原はかし長ふござりますすが横にされば儘か私此  
の邊の地理はくはしゆふござりますから大丈夫ですと云ひなが  
ら年寄の源左衛門は荷物をしよひ杖をついてゐる右の五兵衛は  
六ツになる坊ちやんを肩にしよつて段々いく 五アイタ……  
源何うした五兵衛 五何もはらがいたむやうでございます 源  
冷へたのだらう 五何うも痛んでたまりません 源何んにしる  
坊ちやんを下したかよからう 五疝氣だに見へて堪らないので  
源ソイツは叶けないと云ひながら源左衛門が荷物を下してらば  
へ来て子供を下してコトへてゐる五兵衛の脊中をさすらうとす  
ると足をすくつたらバツタリ夫へ倒れたのをのしかゝつて五兵



傳 ト 原 塚

衛が源左衛門の胸板を一と管めてたウーと云たるを見て八  
ね前源左衛門を……五何にも騒ぐにやア及ばねへ古ひ交句に  
ならべるやうだが人里放れた野原と云ひあたりはさく人もね  
からゆるく、俺が云つてきかせるから能くきけ實は俺も永い間  
悪事をして處々方々と飛あるきね前の亭主の處へ奉公をして今  
日が節まで送つて居たのはゾツコンね前にはれて居たからさ自  
分から見ると十五六も年上の彌六一人を守つて居るのは氣の毒  
な事だと思ひ今度のさわぎを幸はひに親切にかしにこれ空でつ  
れ出し色には大層つれは邪魔と源左衛門を殺してしまひ是から  
俺が年來の望みをコ、デとげるのだ與様何うも仕方がねへ往生  
をしねへと手を取らんとするを八重子はふりはらひ 八倍は左  
うしたたくみであつたかコ、ナ不忠ものめ 五不忠も何にもあ  
るものか……と泣出す子供をけたをし八重を引倒してアツヤ強

傳 ト 原 塚

森をなさんとするを八重は一生懸命身体をもがひたから前にあ  
つた短刀がうしろへまはりましたコ、幸はひと五兵衛が乗か  
る間にキラリ引抜いたウンと下から突た突もついたり思ひ隠一  
名嫌の戸波りと云ふ肛門から翠の間へ……あまりきれいな場所  
じやアございませんグサリついた五兵衛め向ふをつかふとして  
此ちがつかれたアツと五兵衛のつげに倒れた處を流石は彌六の  
妻不慮ものめとしかり胸のあたりを三度つきはついたが女の膽  
弱ドツとしりへに倒れる處を ○阿母様と六ツになる 八、オー  
無事で居たかと抱かへさめとどないてゐる内に夜はしんく  
どふけ渡りまして泊るべき家へもなく如何なさんと思ふと  
氣がついたは足をひどくにちつたと見へて跛者になりましたッ  
コ、デ子供をつれて肩を力に夜あけを待て志さす親族の元へゆか  
んと此の原へ出るとバツタリ逢つたは夫なり又甥の小太郎並び



に小島彌太郎黒鉄上野等に面會いたしたは實に地獄で佛と云ふべきもの是から駕をかり馬の脊をかりて越後の春日山日ならずして到着におよび謀信公へ御目通りをして小太郎が親族平賀志摩と共に今度の禮を述べました茲に於て小太郎等には家を下されて手厚く世話をしたは名代な義勇な大將然るに茲に天運廻り來つて日本三景の一たる奥州松嶋に於て彌々小太郎が仇討に及ぶ一席……

第十席

然るに伯父伯母と共に小太郎は長く越後家の厄介になつて居まする毎度食客の御話しを申しますが何うしても立寄れば大木の影越彼の國の名代の義將上杉家の食客ですから何所へ参りまして心よく馳走をしてくれますす三杯目にはうつと出たと云ふ食

塚原ト傳

塚原ト傳

客とは違ひます誠とに氣樂な身終此頃は僕を一人使ひ相當な風敷を貰つて僕と共に四人ぐらしで居ます今日日は日和もよふございますから氏神へ參詣をいたして今御宮を去らんとする所に二名の僕をつれてヒヨロ〜とした立派な侍。〇コレ〜夫へ見へるのは塚原どのではないか小太郎どのではないかと云はれ立といまつたが小ハイ侍御れへ参る小ハエ一鳥波八幡様へ參詣をいたしました侍大層貴公は評判がいふナ若侍ひが寄るとさわる塚原は劍術の銘人である豪傑であると云ふがなも噂のみを聞いて未だ貴公の腕前と云ふものを拜見した事がない今日コ、デ出合つたが幸はひで八幡宮は武勇の神武神とあがめざる事じや此の神前で出合ふのは神慮に叶つてよからうイザ一ツ御立合を願ひます小之は〜長尾氏甚は恐れ入りまし

た中々拙者は未熟者で尊公に御手合せをするなすと云ふ武藝の



塚原ト傳

心得はございませぬホンノ劔術のかたと云ふのは心得て居るのみでございませぬ貴下方は失禮ながら戰場万場往來をなされたる誠どの武者私くしは勇士の邊の上の職に云ふ島水練とやら申す竹刀水劔のみを持て學びましたもの對廬御相手には御相りませぬ偏へに御用捨を願ひます長ハハア一流石に塚原面白事を云ふ邊の上のいくさ島水練はいふナ成程島で水練の稽古をすれば濡れる氣遣ひはない島水練をやらう眞劔を勝負ではない竹刀か木劔で一木やらう小イエ何うか御勘辨を長勘辨とは何んだコレ貴様は面ど向ふと拙者に恐れ入つて陰に廻ると長尾四郎なすは身体ばかり大ききつてうどの大木であるなすと云つて拙者を悪しございに云ふ事覺へがあらう小イエ決して左様ナ事を長イヤ云つたに相違ない立合を致せ小中々御相手には足りませぬ故平に御免を願ひます長イヤ何んと云つても勘辨

塚原ト傳

ならんと罷れば罷るはどつけ上る弱身につけ込む風の神と云ふたどへもある細りに小太郎が能言をしてゐると多くの侍らひが下ヤ〜と来た夫れ喧嘩だ長尾四郎どのと相手は日本に於て劔術の神と云はれたる上泉伊勢守の門弟當時麒麟と云ふ塚原小太郎何う云ふ事になるかしらと各々かたずを呑んで見て居る人が多くあればあるはど猶つけ上つて長サア勘辨ならぬと云ひながら一刀の柄に手をかけた今にて切つてかゝらんの有様塚原は御免下さいと云ひながら向ふの手元へ目をつけて自分の身体へ油断なく心をくばつてゐる其内にヤツト云ふ聲と共に切り込んだる一刀ヒラリかはして手元へ飛び込んだのが早いかわかぬ刀を叩き落して小四郎どの何事ぞと左りの手で向ふの腰にあつた鞘を取り右の手を延ばして此の一刀をヒタリと鞘に納めろの早いの家にもさへざらぬばかり忙然としてゐる長尾



傳 下 原 塚

四郎の手を取てかたへの茶見世へ来て 小長尾氏の御胸前實に  
 恐れ入りましてござる四郎は酒のよいも忽ち醒めてしまひ何  
 にも云はずに居る多くのものはアツと云ふ甚だ失禮を致しまし  
 た御勘弁を願ひます四郎も小太郎の腕前に驚ろひて一度は不法  
 な事を云ひかけたけれども根が馬鹿の人間でないから 四郎恐れ  
 入りましてござると始めて詫言たソコデ二人とも打違だつて立歸  
 りました之が爲めにます家の中の評判がよく願くは小太郎も當  
 家の家來にしたいさうかし御承知の通り身は大體のある身  
 ある内々小太郎に云ふと 小御承知の通り身に大體のある身  
 未だ天運巡り來らず父兄の仇たる彈正をも討取されば折角の仰  
 せなれども御奉公は出来ませんと云ふ人々も尤もと思ひ是から  
 先別に仕官をすゝめませぬスルと或日の事で相變らず彼の八幡  
 宮へ參詣して鳥居まで歸つてくるときたねへ乞喰が尤も非人

傳 下 原 塚

にあんまり奇麗なのはありませんが之は取りわけてきたないね  
 こもが癩病だと見へてうみ血がだら／＼ながれて来るを紙で拭  
 ひながら洗手の水を呑んでゐる然し誠とに筋骨が逞ましひ小太  
 郎之を見て立派な男だがかわひさうにと物にあはれみがある小  
 太郎哀れに思つていくらの金を袋の中から出して 小「コレ」  
 非人少々遣はすぞ 非有難ふ……オヤ若様ではございませぬか  
 小「フツ……」其方は何ものである非人は蕚をはねてくるりとつら  
 の皮をむいた人のつらの皮をむく奴があるがうぬの面の皮をむ  
 く奴はない生獣をうすくのして顔へはつたを取る小太郎が見る  
 とビツクリした 小「イヤ其方は熊吉ではないか 熊若旦那いろ  
 ね話しがございますか御宮に近ひ處では人目もあり 小「イ  
 ヤ拙者の宅があるから夫れへ參れと非人のきたない衣類を着た  
 なりに自分の宅へ熊吉をつれて參りました 小「コレ 佐介や 熊



塚 原 ト 傳

ハイ水を取つて足を洗はせ跡で湯をたてしやれ 佐へエー……  
オヤ／＼きたない乞喰でございますね 小「夫れでも湯に入れて  
洗へばきれいになる早く湯を沸してやれ兎も角も先へ足を洗は  
して之へ通せと是れから足を洗はせ何や彼やして居る内に湯が  
沸き其儘では何分きたないから悉皆衣類を替へさせ奥座敷へ  
通し久しぶりの對面 熊御機嫌よふございますか 小「其方の爲  
にいゝろく 先年厄介になつた事は忘れない誠とに忝じけない  
熊何うなさいました 小「貴様は何うして左う云ふ姿になつた  
熊誠とに何事も世の中は妙ナもので箱根で御別れ申し家へ歸る  
と間もなく親父がなくなりまして御承知之通りお袋が先きへ死  
んでしまつて兄の番作を扱けては別に兄弟とてもない身体澤山  
もございません身代を親父に譲られて博奕と女酒で遣ひ果して  
しさい然し親父は學文こそございませんがれ寺の説教で度々聞

塚 原 ト 傳

いたとやら何うか兄番作に巡り會若様の爲に力を盡も人は一代  
名は末代と云ふ事を忘れるナと云はれましたを水の泡にして僅  
かの間だに身代をつぶしコンナ身体になりましたか盜人は致し  
ません少しの金を寺に納めて兩親の祠堂金として兄番作と貴下  
のありかを尋ねて歩きまする其内に多くもございません時費の  
金はなくなりましてよんせころなく袖乞とまでなりましたがコ  
ンナ大きな身体で病氣もなければ人の懸れみか測ふございます  
夫れからフイと思ひついて癪病やみコンナつまらない身躰だど  
人が可愛さうだと思ひ錢を呉れる方も多ふございます夫れで  
コトして廻つて居ります然し神佛の加護で若様に御目にかゝり  
まして誠とに惚しふございます就きましては其の後は如何にな  
りました未だ思し召しは遂げられせんか兄番作は矢張一緒に  
居りますか問はれて涙を流した小太郎 小「イヤ其方にと誠と



塚 原 ト 傳

に氣の毒だが番作は死んだ 熊エー番作は病つて死にましたか  
小イヤ左うでない實はコノ向ふの座敷にお出でなさる伯父の弱  
六郎どのを助けやうとした時コレケ様と佐竹探の悪人  
佐竹彈正の手者の爲に一命を捨てた話しを委細に物語り涙な  
がらに聞た熊吉何に思ひけんニツコリ笑ひ 熊有難ふ存じます  
戰場で云へば旗下に斬り込んで来た敵を追ひまくつて討死した  
も同様兄番作は天晴な侍らひらしい御奉公を致しました左様な  
れば何うぞ是れから後不調法ナ私くしでございませすが兄番作同  
様に御引立を願ひます逆も御役にはたちますまいが忠義の二字  
は兄番作に勝るとも劣らぬ私くしでございませと申しませと塚  
原小太郎大きに喜こび 小夫れは千万悉しけない就ては熊吉先  
刻から汝の言葉づかひを聞くに矢張り伊豆の言葉は抜けんな  
熊夫れは抜けませすまい且那様故郷忘じがたしと云つて言葉は

塚 原 ト 傳

の手形とやら生涯抜けるものではございません殊には元來不器  
用な生れつきです 小イヤ夫れが恰かも幸ひと云ふのな何うと  
や貴様伊豆言葉の抜けんのが幸はひ一ツ間者になつてくれまい  
か 熊へエー 小佐竹彈正左衛門の手元を調べては呉れまいか  
汝のよう不器用な者がよろしひ彼は常州真壁の城を預かつて  
佐竹の領分の政治万端を預る天晴勢ひのある彈正當時真壁の城  
中に居るよし其方真壁の城下に参つてケ様とにせよと申して  
も逆も其の指揮通りには届くまいソコは臨機處變何か其方の働  
らきをもつて彈正の元へ棲み込み一ツ彼の容子を探つて注進を  
してくれろと云はれて暫らく考へて居りました熊吉 熊旦那  
まい、事がございませす然し之れは幾何か資本がかりませすが  
小夫れは金子を遣はす何う云ふ事をする 熊夫れは今コ、デは  
申しません資本に三十か五十も入りませう 小然らば百金遣は



塚原ト傳

すから之を持つて参れ夫れで下足なければ又沙汰次第遣はず  
であらう熊人間の智慧の出る時には智慧の出るもので私くし  
が此の金を持つて天晴御用を達しませると約束を致しました  
人は其晩はコゝに寐て彌六にも面會をし翌日は早くから立ちま  
して近邊の髮結床で頭を美麗に整へ衣類を替へ江戸表に参りま  
して其頃をひ江戸に町と云ふものはございませんが分りがよい  
から之で申上げますいゝ買物をして常陸の國眞壁の御城下に  
参り藤屋半兵衛と云ふ宿へ小間物居と云つて泊りました其時分  
は公然と娼妓と名乗る者はふいませんが只今で云ふ湯賣が旅籠  
屋にはあつたもの筈の家にはすみと云ふ女がある誠に別品で客  
扱ひがいゝ夫を熊吉が呼では酒でも呑せ金などを遣り又は小間  
物の荷の内から櫛や簪を遣ますが中々此の女他の者とは違つて  
熊吉の云ふ事を聞かない恰度七日ばかし茲に泊つて居たが小間

塚原ト傳

物屋と云ふ觸れ込みだから毎日御城下を賣りに廻り日が暮れて  
歸つてはれすみに酌をとらして酒を呑み櫛や簪を遣つて遊んで  
居ります亭主が旅籠代を催促に来ると熊此の邊に質屋はあり  
ますか亭をございます熊あるならば之を質に入れて下さいと  
荷物の中にある小間物を質に入れ拂ひをする左うしては酒を呑  
みおすみに物を遣る恰度一月ばかしコゝして居る内にすつかり  
資本でなくなつてしまつた五六日拂ひをさせんから亭主二階  
へ上つて参りました亭御容様御旅籠代を頂戴いたしませす今日  
で六日になりませが勘定は何うなりました熊誠に済みませ  
んが一文もございません亭元談云つちやア叫ませんなくなつ  
たも云つて拂ひをされなけりやア困ります何か残つて居りませ  
うから賣つて拂ひをなすつてくれんさい熊残つて居るのは  
帳面にコゝにある矢立ばかり亭ソナ物を取つた處が仕方が



傳 卜 原 塚

ない 熊就ては御亭主お前さん處のおすみさんは堅ふございませ  
 す十何うしても私くしの云ふ事を聞てくれません 亭アレは幾  
 人ですから幾何金を積んでも云ふ事はさゝません 熊夫れでは  
 誠とに恐れ入りますすが何んどかして旅籠代を返し申すやうな  
 事に致しませう實は私しは伊豆の者以前は獵夫で身躰が御覽の  
 通り大きいくつて力がございませす 亭成程力がありうらだ 熊人  
 足杯をして居りましたが生涯人足や獵夫で終るのはつまらない  
 と思ひまして鎌倉に至りまして小間物屋の内へ之れは少しく親  
 類ですから夫れへ奉公人でもなく食客でもなくぼんやり奉公を  
 して居りました娘が私くしに戀れて 亭オイ 勘定もしない  
 でのろけちやア困る 熊ソコデ養子になれと云ふので養子にな  
 りました處が何うも私しは商人に向かないたちで 亭成程れ前  
 さんは商人と云ふたちじやアない 熊ソコデ小間物の荷を仕入

傳 卜 原 塚

れて此方の方へ商ひに出向させました處が荷物も資本も無くなし  
 てしまひ逆も歸へれませんから親方誠に濟みませんがどこぞ  
 公をする處はございませんか私しは商人はイヤです御家中に仲  
 間奉公に入れて貰ひたいもんです左うゆかない何故だと云ふと近頃  
 れませう 亭夫れがね何うも左うゆかない何故だと云ふと近頃  
 は問者と云つて仲間奉公をしなから敵へ機密を知らせるなすと  
 云ふものが幾らもあるんです 熊私くしは力は強ふございませ  
 が侍らひでないと言ふのは分りませう二年か三年奉公をして左  
 うして故郷に歸り親父をもつて鎌倉の養家へ詫びをじやうと思  
 ひませ誠とに濟みませんが何分御願ひ申します亭主しばらく考  
 がへたが嘘でない夫れヒやア一ツ話して上げやうと彈正左衛門  
 の部屋 熊久太と云ふのが懸念だから之れへ話しをして熊吉を城  
 内へ連れて役人が懸べて見たが侍らひではない根が獵夫だから



塚原下傳

之れなら大丈夫と云ふのでとう／＼抱へるやうな事になりまし  
 た仲間部屋に熊吉と云つてコロがつて居る彈正はかゝる事とは  
 つゆ知らず或日かりくらを致しました之れは治に居て乱を忘れ  
 すと云ふ侍らひが武術足なるとしの爲め一統の者を連れていよ／＼  
 かりくらと云ふ事になつた建久の四年右大將頼朝が富士の磯野  
 でかりくらを致したのを日本三大層の一ツと云ふ其後諸大名が  
 猪獵と名付け又は鹿がりと名づけて時々催はしがありましたサ  
 アいよ／＼かりくらとなる山又山から鹿をかり出すものもあ  
 り兎をかり出すものもあり或ひは熊なすを捕るものもある是等  
 は戦さで云へば兎首を取つたも同様折りしもツツと云ふ聲が聞  
 へるも向ふの方から飛び出したのが一疋の暴れ猪十才以上にも  
 なるか前に居る人足四五名を蹴倒します／＼暴に暴れて彼の牙  
 にかゝつて倒れるものもある彈正左衛門之を見て誰かあるアノ

塚原ト傳

猪を射止めると云つたが誰も出るものがない此時傍へに居た例  
 の熊吉主人に見知られるは今日にあり突然夫れへ現はれ出で  
 りかゝつて猪の頭上を拳をかためて二ツ三ツ打つと猪はゴロツ  
 と夫れへ倒れる彈正之を見て天晴なり彼の者は何者だ○手廻  
 り仲間熊吉と申します彈劔らさ美事である充分に食糧を與へ  
 士分に取りたて遣はせコ、デかりくらがはてると二十石祿を頂  
 戴して御近習になり名字はないかど聞くと伊豆の嶋生れたと云  
 ふソコデ伊豆嶋熊吉と名乗りました之れが問者となつて一女小  
 太郎の元へ知らせる力がある云ふのでます／＼彈正に愛され  
 五十石までになつた然るに佐竹彈正は伊達家の家來伊達將監と  
 云ふものゝ娘を自分の惣領の妻にしてあるから此度男々の對面  
 をせんと云ふので奥州へ罷り越し其序でながら松島を見物す  
 ると云ふ熊吉大きに喜こび小太郎の元に書面を送つたいよ／＼



松島の仇討と云ふ大團圓は鳥渡一と思つて……

第十一席

塚原ト傳

借て彈正左衛門は自分の長男の嫁は奥州大崎の城主伊達家の一門伊達將監と云ふもの息女です彼と結婚の式を舉げてから三ヶ年の間男同志の對面がございませんで今回之れに参り序でながら日本三界の一ツ松島を見物をするので今此の事を申し送つてあります早くも聞かぬ熊吉天の助けと喜ぶ早速此の事を早急脚をもつて越後の國上杉の元に居る小太郎勝義の元に知らせました小太郎天運茲に至つたりと早速此の事を鬼小島彌太郎に話すとよし此の方も幸はひにして開暇である松島見物かたゝ助勢として参るであらう黒鐵上野長尾四郎と之を聞て大いに喜ぶこび吾々も御助勢をいたさう其の他面白半分の上杉家名

塚原ト傳

代な豪傑七八名各々武邊修行を云ひたつて小太郎と共に松島に來る此方はかゝる計畧のあらうとは知りませんで立派にいでたつたる彈正左衛門の一行は大崎に着いたしまして先づ將監の邸に兩三日泊りいと町重なる扱かひを蒙り夫れから自分の供廻りをつれて松島に参りました今では流車の便りがありますから東京を出て日光を参詣をして松嶋に廻り成田を参詣をして晩方に歸へるなんぼ何んでも左うはゆきませんで便利になりました其頃には中々松島見物なるとは容易なものではございませんで實に松島は翁も扶桑第一にして風俗文選へ書かれた位の絶景いはんかたもない八百八島と云ふ位の朝来て晩に來て風景が變ると云ふ何んとも褒めべき言葉もないので嗚呼松嶋やと云つた位の彈正左衛門酒を呑み岸邊に於て床几に腰打かけ頼りに此の景氣を褒めて居る天正八年三月の上旬の事でありませんで朗かな春色に



塚原下傳

うかれて彈正左衛門も供の人も一同酒なすを呑んで居る俄に聞  
へるドン／＼と云ふ足音之れはしたりと振り返つて見ると云ふ  
と後ろ鉢巻十字にあやどり野袴を高くにかきあげて一人の若  
侍ひツカ／＼と彈正左衛門の前に來たつた。○如何にや彈正よ  
も忘れは致すまい塚原土佐の二男小太郎勝義なり先達て汝奸計  
をもつて罪なき父土佐を路上に於て殺させ剩さへ兄弟帯刀を城中  
に於て割腹なしさしも名家たる塚原家も一度斷絶に及んだり其  
恨み忘れ難く今日まで種々艱難爲たる甲斐有て茲で會たば盲龜  
の浮木花待得たる今日の對面イザ尋常に勝負に及べど之はと驚  
ろく彈正續ひて休息を爲し居たる大勢の家來れ主の大事は此の  
時なりと名々鞘を拂ひ刀を抜くもあれば又鎧を取つて捕へるも  
のもある其時傍へ松の木影より現はれたる黒鐵上野鬼小島  
原太郎長尾四郎守口半度谷川新左衛門與倉隼人各々一刀を引き

塚原下傳

抜きサア惡人佐竹彈正の家來せも小太郎に吾々は助勢を致すイ  
ザ來れと云ふと跳り込んだ處が大勢を相手に數年の間だ戰場に  
出て稽古を致した軍人夫れが面白半分に暴れたのだから堪りま  
せん大勢従がつて居た家來がアチラ此方へ追ひまくられました  
彈正も今は是迄と思ひけんイザ此の上は勝負なしくれんと引き  
抜ひたる一刀傍はらを見る例の伊豆島熊吉が居るコゝ云ふ時  
に役にたてやうと思つて抱へたのだから彈熊吉兼々頼んで置  
た小太郎とは此者なり助勢に及べと云ふと熊吉は拳を握めて佐  
竹彈正の横面を碎けるどばかりに打つた強己れ不慮者熊吉汝  
は目があつても飾穴同然だ俺は伊豆の國の獵夫でも兄の秋山番  
作は塚原様の御家來だ汝が爲めに眞壁の松原で殺され其の恨み  
を雪きたいと思つて居た處が今日いよ／＼仇討と云ふので今の  
玄拳は兄の恨みの玄拳だ今まで汝の家來になつたは小太郎さま